











復興の礎は
いまここに
一歩、一歩

平成
30年度

## ふるさと・きずな維持・再生支援事業

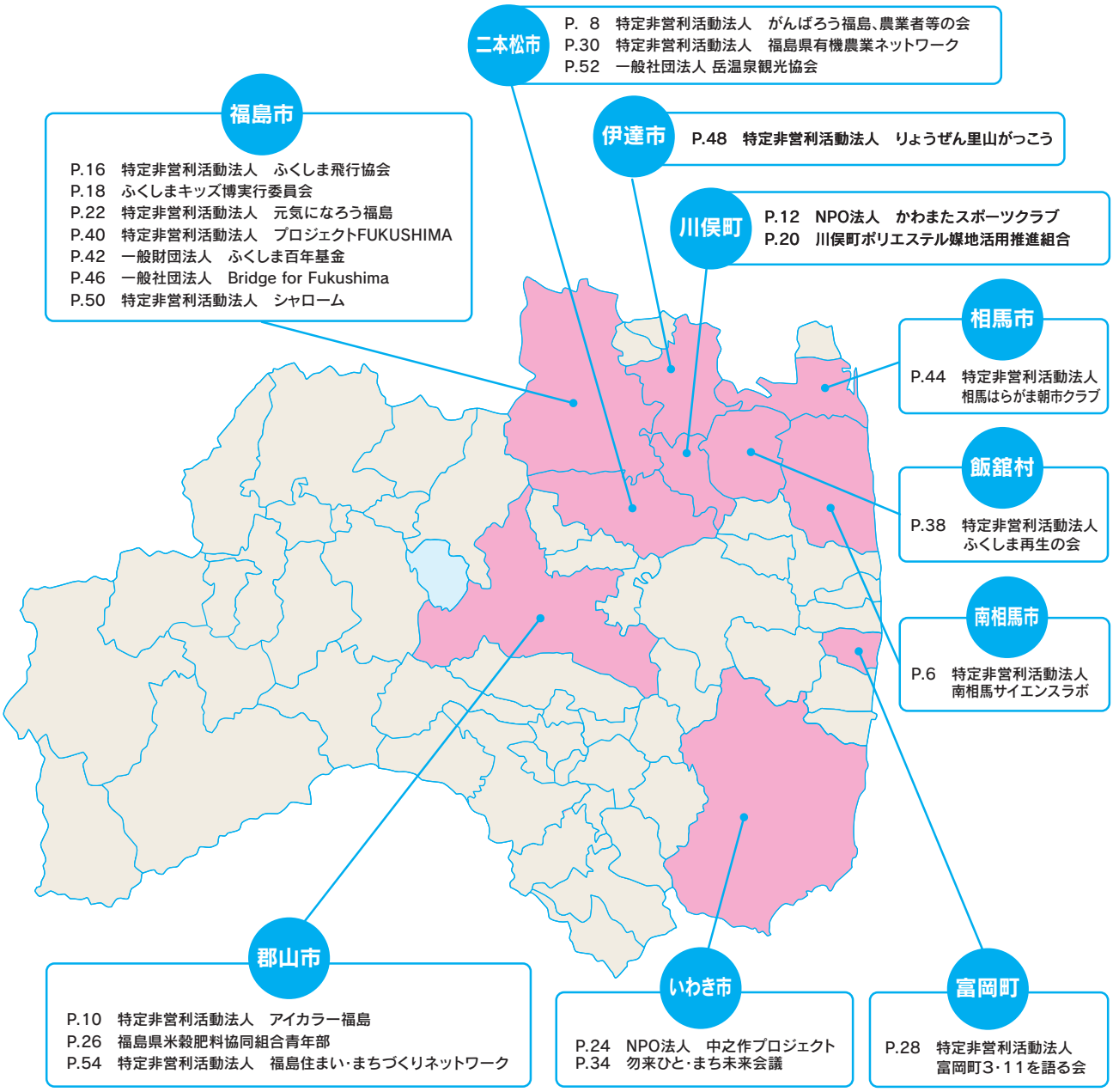
# 活動成果報告書

福島県

多くの県内外の
団体の皆さまから
ご支援いただきました。
ご協力ありがとう
ございました。




本事業の採択団体の所在地を表示しております
（補助金交付決定時点H30.6.1）




## ふるさと・きずな維持・再生支援事業について「ふくしま復興ステーション」からご覧いただけます。

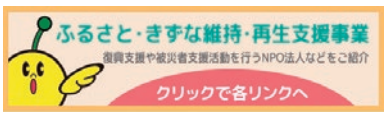
**ふくしま復興ステーション　～復興情報ポータルサイト～**

「ふくしま復興ステーション」は、ふくしま復興の現状と取組を“見つけやすく”“分かりやすい”形で世界に発信する福島県公式復興情報ポータルサイトです。




【福島県】　http://www.pref.fukushima.lg.jp/
▶福島県ホームページよりバナーをクリック!

【ふくしま地域活動団体サポートセンター】　http://f-saposen.jp/
▶トップページの「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」バナーをクリックすると項目が表示されます。
各年度の採択団体の事業内容、活動のようすなどをご覧いただけます。






# はじめに

東日本大震災から8年が経過しましたが、福島県では現在も約4万人の方々が避難生活を続けており、生活再建における不安の払拭、地域コミュニティの維持・再生、さらには原子力災害による根強い風評、時間の経過に伴う風化など、様々な課題が山積しております。

このため県では、内閣府の「NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業交付金」を活用して、東日本大震災及びそれに引き続く原子力災害からの復興等に向けNPO法人等が行う復興支援や風評被害対策等の取組を支援するため「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」を実施しております。

この事業により、被災者・避難者の交流サポートや心と体のケア、帰還のための支援、風評被害の払拭、復興に取り組むNPO等への中間支援など、NPO法人等により被災者同士、被災者と支援者等を結びつける「絆力」を活かした、きめ細やかな支援活動が展開されました。

本冊子は平成30年度「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」により、復興支援・風評被害対策等に取り組まれた25団体の活動実績及び成果についてまとめたものです。

今後、これらの活動が、本県を復興へと導く大きな力となり、NPO法人等をはじめ、行政や企業、地域住民等あらゆる関係者が一体となり、復興に向けた取組が継続的に行われ、本県のきずなの維持・再生、そして、復興がさらに加速されることを期待しております。

結びに、本冊子をより多くの皆様にご覧いただき、関係者の皆様に、これからの地域活動、復興支援・被災者支援活動の参考としていただければ幸いです。

本事業の実施にあたり、御協力いただきました関係者の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、皆様のさらなる御活躍を祈念いたします。

**福島県企画調整部**

**文化スポーツ局　文化振興課**

# 目　次


| ページ番号 | 実施団体名<br>事業名 |
|---|---|
| P.6 | **特定非営利活動法人　南相馬サイエンスラボ**<br>被災地の風評被害対策を目的とした相双地域と首都圏の親子を対象にした自然科学・農業食育・歴史文化等の体験交流活動 |
| P.8 | **特定非営利活動法人　がんばろう福島、農業者等の会**<br>顔の見える関係には風評被害はなし！　～県人会との連携、大収穫祭、アグリ通信～ |
| P.10 | **特定非営利活動法人　アイカラー福島**<br>あがらっしゃい！ふくしまのおいしい発信 |
| P.12 | **NPO法人　かわまたスポーツクラブ**<br>スポーツの力を信じて！健康づくりとコミュニティー交流の支援事業 |
| P.14 | **特定非営利活動法人　Social Net Project MOVE**<br>「ふくしまみなと未来塾」2020年へ向けて |
| P.16 | **特定非営利活動法人　ふくしま飛行協会**<br>「ジュエリーふくしま」　～福島の魅力を世界へ発信～ |
| P.18 | **ふくしまキッズ博実行委員会**<br>ふくしまキッズ博 |
| P.20 | **川俣町ポリエステル媒地活用推進組合**<br>川俣町の復興　新たな施設園芸の取り組みへの支援活動 |
| P.22 | **特定非営利活動法人　元気になろう福島**<br>地域の力による風評被害払拭の為の日本酒作りプロジェクト |
| P.24 | **NPO法人　中之作プロジェクト**<br>空き家を活用した地域コミュニティづくり |
| P.26 | **福島県米穀肥料協同組合青年部**<br>県産米消費拡大プロジェクト　～米の多様性と福島の現実～ |
| P.28 | **特定非営利活動法人　富岡町３・１１を語る会**<br>富岡町の未来を担い、富岡を語り継ぐ人材育成プロジェクト |

| | |
|---|---|
| P.30 | **特定非営利活動法人　福島県有機農業ネットワーク**<br>スタディツアーや農業体験による関係人口の創出と新しいコミュニティ促進事業 |
| P.32 | **特定非営利活動法人　団塊のノーブレス・オブリージュ**<br>請戸小学校物語の福島への継承 |
| P.34 | **勿来ひと・まち未来会議**<br>既存住民と避難住民のコミュニティ形成イベントによる両住民の交流促進事業 |
| P.36 | **学校法人　山口学園　ECC国際外語専門学校**<br>福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」 |
| P.38 | **特定非営利活動法人　ふくしま再生の会**<br>いいたてコミュニティの再生　～心とからだの健康のために～ |
| P.40 | **特定非営利活動法人　プロジェクトFUKUSHIMA**<br>プロジェクトFUKUSHIMA！2018 |
| P.42 | **一般財団法人　ふくしま百年基金**<br>寄付文化醸成を目指した遺贈寄付等説明会及び研修会 |
| P.44 | **特定非営利活動法人　相馬はらがま朝市クラブ**<br>事業者データベース＆マッピング事業 |
| P.46 | **一般社団法人　Bridge for Fukushima**<br>ロジックモデル普及事業 |
| P.48 | **特定非営利活動法人　りょうぜん里山がっこう**<br>子どもとあそびを通して、地域の人々、県内外のふくしまの復興に思いを寄せる人々とつながり、体と心の向上を目指すプロジェクト　～思いを分かち合う人づくりも共に～ |
| P.50 | **特定非営利活動法人　シャローム**<br>子どもたちが「福島の今」と「自身の経験」を発信する「ひまわりプロジェクト」地域間交流事業 |
| P.52 | **一般社団法人 岳温泉観光協会**<br>安達太良山を起点とした県内周遊による風評払拭事業 |
| P.54 | **特定非営利活動法人　福島住まい・まちづくりネットワーク**<br>避難社会情報ツール作成による被災12市町村の復興支援者への絆力支援業務 |
| P.56 | **アンケート調査結果** |
| P.64 | **成果報告交流会** |

# 活動団体紹介

被災地の風評被害対策を目的とした相双地域と首都圏の親子を対象にした自然科学・農業食育・歴史文化等の体験交流活動

# 特定非営利活動法人 南相馬サイエンスラボ

| 団体概要 |
| --- |
| 〒975-0002 福島県南相馬市原町区東町2-50<br>TEL・FAX 050-1564-9124<br>E-mail sciencelabo2011@gmail.com<br>URL http://www.sciencelabo2011.com |

| 活動地域 | 南相馬市 |
| --- | --- |
| 活動分野 | まちづくり<br>観光振興<br>環境保全<br>子どもの健全育成<br>科学技術 |

## 課題・背景

全国の地方都市には社会・経済・産業・医療・食料・エネルギー・教育等様々な問題があった。南相馬市はそれに加えて震災によって原子力災害を受けた。平成28年に20km圏内に出されていた避難指示は解除され、翌年に幼稚園や学校が再開するなど復興は進みつつある。しかし、今もまだ農産品等に対する風評被害は続いており、首都圏での被災地に関する報道も見られなくなってきたことなど、風評被害解決には多くの課題が存在する。

## 目的

私たちは福島県の風評被害払拭を目指すため、川崎市の人々を南相馬市に招いて地元の親子と一緒に自然科学・農業食育・歴史文化等の体験交流活動を行うとともに、首都圏において親子科学実験教室を実施することによって、都会と被災地の交流を深め、被災地の現状を多くの人々に知ってもらい、福島県の風評被害の払拭に貢献することを目的とした。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

南相馬市出身の羽根田利夫氏が羽根田カンポス彗星を発見して40年になるのを記念して「**新彗星発見者羽根田利夫物語**」を制作するとともに、星の村天文台の大野裕明先生、東亜天文学会の佐藤裕久先生をお招きして**羽根田利夫さんの生涯を振り返る講演会**（9月1日）を実施した。なお、この事業が元になり市民による南相馬市の偉人の情報の活用を求める署名活動（800名）が起こり、南相馬市長から偉人を活用する内容の回答書が届いた。



### 〈取組2〉

日本最大の科学イベントである**サイエンスアゴラ2019**（11月10日）に出展し、福島県赤十字血液センターの協力を得て血液の仕組みや献血の重要性を、体験を通して学ぶ「**血液ってなんだろう?**」を実施した。自ら赤血球や白血球、血小板になりきり体を使って理解する学びは多くの参加者に血液の重要性を理解させることができた。また授業後に南相馬市の震災からの復興の様子や当法人の教育による復興活動の紹介を行った。





### 〈取組3〉

川崎市の市民団体が日頃の活動を発表する**ごえん楽市**（2月2日）に講師として招かれ、被災地の復興の状況と当法人の活動を紹介すると共に、実験や体験を通して蜂蜜をテーマに人間と蜜蜂の関係を理解する「**はちみつってなんだろう?**」を巣鴨養蜂園の米田望さん（はちみつマイスター）の協力を得て実施した。当日の様子は神奈川新聞朝刊に掲載されるなど、福島県の復興への取り組みが首都圏に広く知れわたることになった。

## 事業の成果

南相馬市と首都圏の人々の交流活動を実施することで、被災地の状況や当法人の活動を理解し共有する企業や団体、個人とのつながりが広がった。特に地元の新彗星発見者羽根田利夫さんの彗星発見から40年を記念して、星の村天文台の大野裕明先生と東亜天文学会の佐藤裕久先生をお招きした講演会は会場が満員になるなど、内外の人々に南相馬市の偉人の情報が広がるきっかけとなった。同時に制作した「新彗星発見者羽根田利夫物語」も大変好評だった。また、福島県赤十字血液センターの協力を得て今年度3回実施した「血液ってなんだろう?」は日本最大の科学イベントであるサイエンスアゴラ2018に採択されるなど、当法人の活動や被災地の情報が多くの人々に伝わる結果となった。その他、只見町、川崎市などから招かれて実施した親子科学実験教室は被災地の情報を多くの人々に届けることとなるなど本事業が風評被害解消に向けて確実な成果を上げたと確信している。

## 今後の展開

世研話、巣鴨養蜂園、Co-Lab、ミテモ株式会社、川崎市教育委員会、福島県赤十字血液センター、福島県相双建設事務所など、市外の様々な団体との繋がりを今後も発展させ、次年度も南相馬市の教育や自然や歴史文化などをテーマにした都会との交流事業を行いたい。また、新たな親子科学実験教室の内容を検討することで、交流をさらに発展させ、福島県の風評被害の払拭に貢献したいと考えている。

顔の見える関係には風評被害はなし!
～県人会との連携、大収穫祭、アグリ通信～

# 特定非営利活動法人 がんばろう福島、農業者等の会

| 団体概要 |
| --- |
| 〒964-0976 福島県二本松市新生町490<br>TEL 0243-24-1001<br>FAX 0243-24-1536<br>E-mail s@farm-n.jp<br>URL http://www.farm-n.jp |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 福島県、首都圏 |
| 活動分野 | まちづくり<br>観光振興<br>農林漁村中山間<br>災害救援<br>経済活性化 |

## 課題・背景

震災に伴う風評被害はいまだ続いている部分があり、この解決のためには、農家自らが結束するとともに、県内外の消費者や団体との「つながり」を強めていく必要がある。

## 目的

県内外の消費者や団体との「つながり」を強めるため、県人会の県内農家視察ツアーを実施する。また、秋には、首都圏消費者が気軽に参加できる「大収穫祭」を実施する。さらには、これらの基礎的資料として、県内農家を掲載した情報誌を四季ごとに発行する。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

県人会参加による「**福島の農家を訪ねる旅（ツアー）**」の実施。
東京都東久留米県人会を対象として8月上旬に実施。
（二本松）スタディファーム　⇒　（土湯温泉）宿泊⇒（福島市）桃狩り　のルート。
参加者40名。





〈取組2〉

首都圏の消費者等を招致し、二本松市内の農家で、11月上旬「**大収穫祭**」を実施。総参加人数150名。



〈取組3〉

福島の農家を紹介する情報誌を四季ごとに発行、首都圏の消費者等に配布した。2,000部×5回（まとめ号を含む）で全部で1万部。

## 事業の成果

今年は、主に、福島県を応援したいという『県人会』を中心に事業展開を行った。その結果、参加した県人会員の紹介で、『国会議事堂に出店』（平成31年4月～）という成果を得た。県外の福島県人会は「故郷福島のために何かをしたい。」と思いつつも、これまでその手法を思いつかなかったが、今回、きずな事業で、それを具体的に展開したことにより、劇的な成果を生み出しつつある。

## 今後の展開

県人会との連携が生まれたため、これをさらに拡大していきたい。具体的には、外国人が福島県人会に入って、福島を応援したい！という動きもあることから、これらとの結びつきを強めていくような活動。

# あがらっしゃい！ふくしまのおいしい発信

## 特定非営利活動法人 アイカラー福島

| 団体概要 |
| --- |
| 〒963-0724 福島県郡山市田村町上行合字北川田26-3<br>TEL 090-2362-0155<br>E-mail ysk880326@gmail.com<br>URL http://cws-koriyama.com/yume/ |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 福島県、東京都 |
| 活動分野 | まちづくり<br>子どもの健全育成<br>経済活性化 |

### 課題・背景

国内第3位の大きさを誇る福島県は、山の幸と海の幸に恵まれた素晴らしい地域。くだもの王国福島の名を全国に知らしめてきた。しかし、東日本大震災による原発事故の影響で、一時は県外産を買い求める姿が多く見られた。現在は徹底した線量検査により他の県の産物と変わらないもしくはそれ以上の美味しく安心・安全な農産物となっているにもかかわらず、未だ「福島産」というだけで敬遠されている現状は払拭できない。

### 目的

福島の魅力を発信し風評の払拭に取り組むとともに、活動を通して県内外の心の絆醸成をはかることを目的とする。また福島県内の小学校の教科書にはのっていない福島の知識として、正しい情報を学び、福島の魅力を理解し、郷土愛を育くむと同時に、関東在住の方や福島から避難して定住化してしまった方に福島の良さを知ってもらい、観光、移住や帰還のきっかけづくりをする。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

「**福島のキラキラヒーロー農家のおいしい農産物PR動画**」3本を作成。おいしい農産物を作ることに情熱を注いでいる若手農家にインタビューをし、YouTubeで配信。ダイジェスト版として広告動画を作成し、日本国内広い範囲で福島の農産物、またそれを育てる者たちが元気に取り組んでいる姿を配信し、福島に来てもらうきっかけ作りとした。

アスパラ編は5.7万回再生、福島牛編は10万回再生、なめこは3月末までに首都圏に広告配信。





〈取組2〉

日本橋ふくしま館MIDETTEで来場者が多い土日を選定し、農家とともに美味しい農産物、そのレシピをPRする活動をした。(6/23・24、8/4、11/10・11、2/2・3、3/2・3)

PR方法：農産物や活動内容紹介フリーペーパーの配布、農産物を使ったアレンジレシピの紹介。

時期によって子どもたち（こじはん隊）を動員し、子どもたちと関東方面の人々との交流をはかった。




〈取組3〉

県外との交流イベントの開催

**7/7・8　とうきょう・ふくしま交流キャンプ**（1泊）

**9/1・2　ふくしまこどもおいしいマルシェの開催**

県外から手作りメッセージガーランド（旗）を集め掲示

**3/23・24　ふくしまおいしい体験ツアー**（1泊）

ワンダーファームトマト狩り、福島牛農家見学、東和季の子工房体験などを通じて福島の親子と東京の親子の家族間交流をはかった。

## 事業の成果

ホームページ（http://cws-koriyama.com/yume/）の活用、インスタグラム・Facebookによる細やかな情報発信と、イベント募集に関わる告知はランディングページを準備し、SNS広告と連動しながら多くの動員を集めると同時に、Youtubeでは幅広い年代や地域に活動をPRし、見ていただけるよう広告展開を行った。このことにより、県外へは、福島の農産物の良さ、おいしさを知ることで、いままで敬遠していた福島産の農産物について興味を持ち、良さを知り、福島産の良さを広げる一翼を担うことができた。福島県の農産物も安心・安全であるという正しい情報が伝わった。

また、県内においても、正しい知識と現在の農産物の安全を知ること、子どもたちが自ら活動・発信する姿を見ることで、県外に誇れる農産物がたくさんあることを知り、福島の良さを広めることができた。

## 今後の展開

「あがらっしゃい!」は子どもたちが福島の農産物や加工品の良さなどを発信する事業。さまざまな角度から、子どもたちが正しい知識をもって、参加プロジェクトという枠組みがなくても、素晴らしい福島の農産物を自ら発信できる人財となるよう、知識の提供や体験の機会を創出する。子どもたちの家庭のコミュニケーションで、大人へと知識が伝播し、ひいては福島県民全体で福島の良さを発展できるようになるよう下支えをしていく。

スポーツの力を信じて！健康づくりとコミュニティー交流の支援事業

# NPO法人 かわまたスポーツクラブ

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-1405 福島県伊達郡川俣町大字東福沢字万所内山2-3<br>TEL080-6056-1777　FAX 024-565-3932<br>E-mail kawamata_sc@yahoo.co.jp |

| 活動地域 | 川俣町 |
| --- | --- |
| 活動分野 | 文化芸術スポーツ<br>子どもの健全育成 |

## 課題・背景

震災から7年が経過し、川俣町の一部に出された避難準備地域が解除され、本格的な生活が戻りつつあります。離れ離れになってしまったコミュニティーの再興には誰もが不安を抱えています。

## 目的

かわまたスポーツクラブの持つネットワークを生かし、健康づくりだけでなく、スポーツを通じたコミュニティー促進を行い、町の活性化に貢献する。

## 取組内容・実績

〈取組1〉

**①スポーツ吹矢教室の活動支援**

実施：6月～3月末
開催：毎週月曜　10：00～12：00
講師：県スポーツ吹矢協会川俣支部
内容：講師により、吹矢準備体操や基本動作を教わり、初心者でも楽しんで取り組むことができるように行う。
実績：30回実施／487人参加（平均16.23人）





**②グラウンドゴルフ教室の活動支援**

実施：6月～3月末
開催：毎週水曜
講師：川俣町グラウンドゴルフ協会
内容：初心者でも楽しくゲームができるまで講師より指導を受けて行う
実績：35回実施／323人参加（平均9.23人）



〈取組2〉

**①親子で楽しめるスポーツ活動支援**

実施：6月～3月末
開催：毎週水曜日
講師：クラブマネジャー（公認スポーツリーダ）
内容：子どもたちのアウトドアスポーツに抵抗を感じる
　　親世代に対して、安心して楽しむことが出来る
実績：37回実施／307人参加（平均8.30人）

〈取組3〉

**①健康ウォーキングクラブの活動支援**

実施：6月～3月末
開催：月2回（土曜）　9：00～11：00
講師：日本ノルディックフィットネス協会
内容：講師から正しいフォーム・ポールの使い方を
　　教わり、5～8km程度のコースをポールを用いて歩く。
実績：17回実施／236人参加（平均13.88人）





**②健康ウォーキングクラブの活動支援「おしゃべりハイキングクラブ」**

実施：年5回
講師：森の案内人　菅野寛一郎
内容と実績：1.あぶくま洞ハイキング　6/16（31名）
　　2.雄国沼ハイキング　7/7（24名）
　　3.沼沢湖ハイキング　8/5（27名）
　　4.田代山ハイキング　10/6～10/7（15名）
　　5.ひたち海浜公園ハイキング　3/23

〈取組4〉

**④エクササイズ教室の活動支援**

実施：6月～3月末
開催：月2回（金曜）　19：30～21：00
講師：キャンダンススタジオ　佐藤香
内容：筋力トレーニングや音楽に合わせた
　　フィットネスを行うことで代謝を高める。
実績：18回実施／95人参加（平均5.28人）



## 事業の成果

●避難者や帰還者の参加を促し、孤立化防止に貢献できた。
●活動で知り合った者同士が、新たな繋がり活動を行うようになった。
●教室で教わったことを自宅でも行うようになり、健康促進に繋がった。
●他クラブとの連携が強化された。

## 今後の展開

●いずれの事業においても好評を得ることができましたので、継続を検討します。
●町自治体や他クラブと連携し活動範囲を広め、多くの参加者を集めて実施していきたいと考えています。

# 「ふくしまみなと未来塾」2020年へ向けて

## 特定非営利活動法人 Social Net Project MOVE

| 団体概要 |
| --- |
| 〒107-0062 東京都港区南青山1-26-16-501<br>TEL 03-5474-7558　FAX 03-5474-1461<br>E-mail for01@themis.ocn.ne.jp<br>URL http://www.smartcitymove.com/ |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 東京都港区・福島県 |
| 活動分野 | 社会教育・まちづくり<br>観光振興・農林漁村中山間<br>文化芸術スポーツ・環境保全<br>子どもの健全育成・情報化<br>経済活性化・連絡助言援助 |

### 課題・背景

時間経過と共に震災・原子力災害の記憶の風化、関心が薄れています。そうした中、実状を悲観的に捉える視点、楽観視した視点が錯綜しています。それらが情報を一人歩きさせ、疑念や偏見、風評を固定化し、福島の実状から人々を遠ざけているとはいえないでしょうか。しかし、これに翻弄されることなく、厳しい現実に立ち向かい、地域の新生に挑戦し、次世代に地域をつなごうとしている確かな取組が県内随所で結実しつつあります。

### 目的

福島県及び県民が地域の再生・新生へ挑戦する様々な分野の取組を、港区を中心とした首都圏住民に伝え、地方モデルの理想ともいえる先進的で、斬新な取組とその志、姿勢を学び、地方（福島）と東京（都市）を越えた共感のつながりを創造。これを農水産業・新エネルギー事業・社会教育・文化事業でそれぞれの地域の次世代へつなぎ、都市と地方が新しく連携した姿をTOKYO2020の年、全国・世界に発信することを目的に取り組んできました。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

**「福島のここがおもしろい!」交流学習バスツアー**

①開　催　日：平成30年8月11日（土・祝）・12日（日）
②参加者数：107名　うち首都圏参加者45名
③開　催　地：南相馬ソーラーアグリパーク・再生可能エネルギー発電施設・いわき市薄磯集会所・薄磯海岸
④事業内容：再生可能エネルギーワークショップと発電施設見学・生産者との交流学習・いわき市海岸被災学習・子ども伝統芸能体験交流と意見交換会・海遊び交流



小水力発電体験

### 〈取組2〉

**「里山がっこう体験しよう!」日帰り交流ツアー**

①開 催 日：平成30年10月28日(日)
②開 催 地：伊達市霊山町　伊達市立大石小学校・NPO法人りょうぜん里山がっこう
③参加者数：133名　うち首都圏参加者35名
④事業内容：伊達市立大石小学校学習発表会交流・りょうぜん里山がっこうでの交流（米粉ピザづくり・ボルダリング・火おこし・草弓・木工遊び体験・意見交流）



米粉を使ったピザづくり体験



高校生会議

### 〈取組3〉

**「福島の声、響き、願い」音楽交流**

①開 催 日：平成30年12月16日(日)
②開 催 地：港区立みなとパーク芝浦リーブラホール
③参加者数：226名　うち県内参加者102名
④事業内容：福島県立安積黎明高校合唱団・国立大学法人東京工業大学附属科学技術高校吹奏楽部・福島県立磐城高校吹奏楽部公演と合同演奏、合同合唱奏・意見交換会「ふくしまみなと未来塾」2020年へ向けて高校生会議

## 事業の成果

昨年度事業から規模を拡大しつつ、テーマを自然・環境・文化に絞って実施したことで、港区・首都圏からの参加者に明確に「ふくしまみなと未来塾」の目指す交流事業の姿を理解してもらうことができました。また、アンケート調査結果からも県内団体の協力のおかげで、福島県への理解、共感をより促進することができたと考えます。昨年度の事業成果と相まって、港区・首都圏参加希望者の応募はいずれの事業でも定員の5倍～7倍となり、港区及び近隣区の児童・生徒・保護者、地域関係者に広く知られる活動となりつつあります。さらに、本年度より港区全国連携担当との協力・協働関係が確立。「ふくしまみなと未来塾会議」が定例化しました。さらに、何よりも参加者や協力団体から、継続希望の声だけでなく、提案意見が出るようになり、「よかった!」から「もっとこうしよう、したい!」へ、次年度へ向けた、提案が多数あったことです。

## 今後の展開

本年度事業の成果と課題を踏まえて、TOKYO2020へ1年と迫る次年度事業は、2020「ふくしまみなと未来塾」へ向けたPre事業を実施、実現したいと考えています。平成26年本事業の立案当時から目指している目標実現のため、これまで本事業に関わった地域新生へ挑む県内の人々を広く全国に紹介する出版・WEB発信事業と本年度事業で大きな成果を生んだ音楽文化交流事業・高校生会議をより拡大、発展させます。

# 「ジュエリーふくしま」 ～福島の魅力を世界へ発信～

## 特定非営利活動法人 ふくしま飛行協会

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-8251 福島県福島市北沢又字日行壇7-48<br>TEL 024-563-6589　FAX 024-563-6590<br>E-mail info@ffa.or.jo<br>URL http://www.ffa.or.jp/ |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 福島県内外 |
| 活動分野 | 文化芸術スポーツ<br>災害救援<br>子どもの健全育成 |

### 課題・背景

現在の福島県は、市町村ごとの差異はあるものの風評や風化が力強い復興の妨げになっている。特に農業・漁業の生産品は、なかんずく六次化生産品の販売等の足かせになっている。

例を挙げれば、福島県銘柄米などは、顔の見えない中食（ファミレス・居酒屋など）用の米生産にシフトしている。このままでは、顔の見える地域銘柄米が家庭で食べられる可能性が縮小していく。このことは農業生産品6次化の可能性を狭めていく現状がある。

### 目的

現状対策1）風評風化の対策として、福島県民の思いを社会的メッセージ（新聞や包装紙）として、県内外に届ける。

現状対策2）ふくしま飛行協会（ふくしまスカイパーク）の先駆的取り組みを紹介しながら美しい福島（フレコンバックも少なくなってきている）を上空から当協会飛行機（セスナ172P）で視察（立体的施設見学会）する。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

**【希望のブルーラッピング活動】**

このデザインは福島ガイナの19歳の女性デザイナー、揮毫は福島市内で書道教室を主宰する若き女性書道家の手による。いずれも女性の感性で創作され、また「希望のブルー」は商標登録（第6078844号）した。このデザインは平成30年11月29日、福島民報と福島民友新聞に意見広告（15段フルカラー・約45万部）。12月1日からは，県内の小売店舗（JAふくしま未来・生活協同組合を中心に）で贈答品を包装して県内外に風評払しょくを訴えるラッピング（約9,000枚）活動がスタート、平成31年2月をもって終了した。





〈取組2〉

**【立体的施設見学会】**

本事業のタイトルである「ジュエリーふくしま」を体感する事業であり、先駆的なふくしまスカイパークの施設（航空機・スイス関連レリーフ・スイス大使植樹山桜・市民協働彫刻・宇宙桜など）を見学するとともに、希望者（代表者など）には、当該協会所有航空機（セスナ172P）で福島上空の体験視察フライトを実施、元スイス大使ブーヘル氏が感動し発言された「ジュエリーふくしま」を体感していただいた。

## 事業の成果

【希望のブルーラッピング活動】

アンケートの結果、ラッピング活動の有効性について「風評被害払拭に役立つと思いますか」という質問に「大いに役に立つ」と「役に立つ」と答えた割合は45.2%となり，概ね高い評価を得た。しかし想定内ではあったものの、ラッピングシートのインパクトの強さから「わからない」と答えた割合が39.6%と高かった。

次問は、「ラッピングシートの活用を通して福島の支援をしたいと思いますか」というものであったが、「大いに思う」と「どちらかと言えば思う」と答えた割合は71.7%と高かった。「わからない」と答えた割合は15.1%で前問と比較すれば激減した。このように，福島の県民が直接的にC to C（消費者対消費者）で県内外にメッセージを発信すれば福島支援に結びつくということが明らかになった。

【立体的施設見学会】施設見学と上空視察を加えた立体的施設見学

実施回数11回、参加人数274名、上空視察人数80名と好評を博した。特に集客行為は実施しなかったものの、口コミで広がり、ローターリークラブや出版系企業など福島情報発信に熱心な方々に参加いただいた。また、市政見学会との連動で市政全般に連動することができた。

## 今後の展開

ふくしまスカイパークそのものがもつ広域的情報発信能力と異彩を放つ「希望のブルーデザイン」の相乗効果は計り知れない。この効果を活用した全国的集客のイベントの開催、事前活動としての「希望のブルーデザイン」ポスター全国告知など、全国からの福島県への絆を構築していきたい。

# ふくしまキッズ博実行委員会

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-8068　福島市太田町13-17<br>福島民報社広告局企画推進部内<br>TEL 024-531-4161　FAX 024-533-4343<br>E-mail y.hasegawa@fukushima-minpo.co.jp<br>URL https://www.facebook.com/FukushimaKidsExpo/ |

| 活動地域 | 福島県 |
| --- | --- |
| 活動分野 | 社会教育<br>子どもの健全育成 |

## 課題・背景

東日本大震災後、原発事故による放射線の影響で、外遊びが制限された福島県内の子どもたちは、肥満率の上昇、運動能力の低下などの問題を未だ抱えています。この状況を少しでも改善しようと、遊びと運動の機会を与え心身のバランスのとれた健全な発育に寄与するために、2012年「ふくしまキッズ博」を開催し、その後6年間にわたり継続してきました。

## 目的

福島の子どもたちに遊びと運動の機会を与え、心身バランスのとれた健全な発育に寄与する。さらに福島から全国へ、新しい形の遊びを発信できるよう、自治体や関係団体、教育機関、大学生らともに、体を動かす場を提供、手軽で身近な新しい遊びの創造、そして子どもたちが笑顔にしたい、という目標を掲げ事業を推進しています。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

**【大学生が運営する創作遊びコーナー】**

福島市内の4大学で構成する「ふくしまキッズ博実行委員会学生事務局」の学生が自ら創造し、作り出した遊びでふくしまキッズ博開催の2日間、来場した子どもたちと沢山遊びました。今年は「スイスイカーリング」「クレヨンMagic☆彡」「スライム研究所」「『ギョ!ギョ!』っと魚釣り」の4つの遊びが出来上りました。



### 〈取組2〉

**【玩具メーカーブース設置】**

日本玩具協会に協力をいただき、有名玩具メーカー13社がブースを展開しました。知能を使うものや体を動かして遊ぶ玩具、友達と対戦する玩具などたくさんの玩具で会場は賑わいました。






### 〈取組3〉

**【キャラクターステージショー】**

「それいけ!アンパンマン」、「メルちゃん」「シルバニアファミリー」など、人気キャラクターショーで2日間盛り上がりました。

## 事業の成果

2日間で約2万人の来場がありました。夏休みに入ってすぐのイベントが「ふくしまキッズ博」である、という認識が県民に浸透して来たと7年間実施してきて、ここ最近は強く感じられます。まさに「継続は力なり」で、資金面が苦しく、実施することが厳しい年も辞めずに続けてきたことが今、花開いているのではないかと自負しています。来場者は就学時前の子どもたちとその保護者、さらには祖父祖母らと親子3世代で来場する方もたくさんいます。「こどもの笑顔は太陽だ」というキャッチフレーズを第1回目実施の時につくりましたが、皆さん子どもの笑顔を見たいがために来場する、親子の絆も深めるイベントでもあります。

## 今後の展開

次年度は7月27日(土)、28日(日)の2日間、開催を予定している。大きな変更点はないが、内容は少しずつでも進化させていきたいと考えています。子どもたちが笑顔を絶やすことなく、そして健全育成に寄与できるようなイベントにしていきたいと思っています。

# 川俣町ポリエステル媒地活用推進組合

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-1501 福島県伊達郡川俣町山木屋字大松平山1-1<br>TEL・FAX 024-563-2070<br>E-mail yhid3995@yahoo.co.jp |

| 活動地域 | 川俣町 |
| --- | --- |
| 活動分野 | まちづくり<br>農林漁村中山間<br>子どもの健全育成 |

## 課題・背景

東日本大震災により川俣町の一部の山木屋地域は避難地域となりました。解除を受けましたが、帰還者は少なく、主力産業であった農業を再開する人も少なくなりました。そこで近畿大学の支援を受けながら進めてきた、古着をリサイクルして作られたスポンジの様な手触りの「ポリエステル媒地」を活用する施設園芸を推進しました。媒地は、原発の影響や連作障害がなく、重労働の農作業の概念を大きく変える物と考えています。これにより、農業への関心や、農業をしてみたいと思う若者、新規就農者の受け皿として農業を発展させたいと思います。

## 目的

川俣町の復興と新たな農業系態として、将来の農業振興の主力の役割と、本町の帰還者を含む町内外からの新規就農者を支援して川俣町の復興に寄与したと思います。また、近畿大学と共に、町内の小学生とアンスリウムの植え付け体験などを実施し、広くメディアに情報発信をしたいと考えています。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

アンスリウム（花）の栽培を組合員11人が、土ではないポリエステル媒地を活用する施設園芸に取り組み、施設園芸へ町民や町内小学生を招待して復興体験をしました。活動内容を町内外に広報紙や新聞、TVで取り上げていただき、広く川俣町の復興を発信する事ができました。また、日本一の東京の花き市場に行き、花き勉強会をしました。実際の店舗に赴き、花の動向、需要や要望をリサーチしつつ、アンスリウムの宣伝をしてきました。





〈取組2〉

9月に新たに園芸施設9棟が建ちました。アンスリウムの苗が入荷したタイミングで、新規就農希望者の方々と一緒にアンスリウムの植え付け体験を実施しました。実際にポリエステル媒地を触り、土と違い婦人でも簡単に作業ができる事を実感していただけました。今後もより多くの方に、新しい農業を体験していただきたいです。

## 事業の成果

原発の影響で川俣町の一部が避難地域となり、帰還者も少なく、主力産業だった農業も、再開する人々は不安を抱えながらの出発となりました。ですが近畿大学の支援を受けながら進めてきたポリエステル媒地は高齢化の進む農家の負担軽減や、新たな農業スタイルになると考えています。本事業を通して、パンフレットやのぼりを作成して、視覚的に多くの人々の目に触れ、「ポリエステル媒地」とはどの様な物なのか、また、新しい取り組みを町内小学生との植え付け体験で、様々なメディアの方々が発信し、伝える事ができました。子ども達に川俣町の新しい農業の姿を伝え、11名の小さな組合が本事業を通して次のステップへ進む、大きな一歩になったと実感しました。

## 今後の展開

今後は、広く「アンスリウム」の宣伝をして、多くの方に「アンスリウム＝川俣町」と認知していただき、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、公式の花（復興の花）として会場で使用していただける様に、活動を積極的に進めていきたいと思います。また、土と違い、重くない、汚れない、次世代の施設園芸農業を発信して、新規就農希望者を増やして行きたいと思います。

地域の力による風評被害払拭の為の日本酒作りプロジェクト

# 特定非営利活動法人 元気になろう福島

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-8042 福島県福島市荒町4-7 県庁南再エネビル2F<br>TEL 024-563-7166　FAX 024-572-6800<br>E-mail info@genkifukushima.jp<br>URL http://genkifukushima.jp/ |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 川内村 |
| 活動分野 | まちづくり<br>農林漁村中山間<br>経済活性化 |

## 課題・背景

震災以前から高齢化や後継者不足により農業の衰退が懸念されてきたが、原発事故によりその懸念は一層加速し、”生産しても売れない””農業だけでは生活できない”といった声も聞かれる。

川内村でも、帰還から6年が経過する中で大きく復興・再生の歩みを進めてきているが、風評被害払拭及び主幹産業である農業の復興・再生は継続した課題となっている。

## 目的

川内村産の酒米を使用した日本酒作りをきっかけとして、地域の農産物を用いた特産品の開発・定着、地域における継続的な体制作り、地域経済や地域住民の活性化等に取り組む事で、長期にわたる影響が予想される風評被害対応、農業の復興・再生の一助となるとともに、継続して問題解決に取り組んでいくことのできる体制作り及びその実証に取り組んでいくことを目的とする。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

**《地域における継続的な体制作り》**

補助事業終了後も村内で継続した事業となり得る事を目指し、地域住民が主体的に参画できる仕組みづくりとして、下記の取り組みを行った。

- 村内関係者との定期的なミーティング・意見交換
- 地域内連携による日本酒作りの成功事例としての桑折町視察・意見交換会の開催
- 日本酒の仕込み見学



### 〈取組2〉

**《風評被害払拭の為の情報発信・プロモーション①》**

実際に川内村に足を運んでの体験や地域住民との交流を通して、川内村の魅力を直に感じて貰うことを目的として下記の取り組みを行った。

- 日本酒用酒米稲刈り体験ツアー
- 日本酒完成披露会の開催





### 〈取組3〉

**《風評被害払拭の為の情報発信・プロモーション②》**

風評被害払拭のゴールとして「安定・継続して販売できる」事を目指し、生産から販売までをトータル的にフォローするため、下記の取り組みを行った。

- パンフレットやポスター、のぼり旗などの販売・PR用ツールの製作
- 村内酒販店等の意見を反映した商品ラベルの見直し
- 東京での販売会の開催

## 事業の成果

日本酒の生産に関しては、昨年の販売を行った酒販店の意見を基に、デザインの見直し・商品バリエーションの展開などに取り組み、より村民の意見を反映した商品作りを行うことができた。

結果として昨年度を大きく上回る生産本数の実現や、完成した日本酒に対して村内外から好評を得られた事は、川内村の新たな特産物としての発展・定着を実感でき、大きな成果とすることができた。

また、昨年度以上に村内の酒販店をはじめとした関係機関と連携を密にしながら取り組みを進める事ができ、成功事例視察等を通して、より地域関係者が主体的かつ継続的に日本酒作りに取り組むことのできる体制作りに向けて、組織設立の具体的な検討段階まで歩みを進めることができた点も大きな成果となった。

## 今後の展開

引き続き「川内村産の酒米を使用した日本酒づくり」をツールとして、風評払拭や農業再生、川内村の地域活性の一助となるような取り組みを展開していきたい。

一方で、継続かつ自立した取り組みとなるためには地域住民や村内関係者の主体的な参画が必要であることから、本事業を踏襲し、地域が主役となるような運営体制の構築にも引き続き取り組んでいきたい。

# 空き家を活用した地域コミュニティづくり

## NPO法人 中之作プロジェクト

| 団体概要 |
| --- |
| 〒970-0313 福島県いわき市中之作字川岸10<br>TEL 0246-55-8177　FAX 0246-55-8178<br>E-mail nakanosakuproject@gmail.com<br>URL http://nakanosaku.xsrv.jp/ |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | いわき市中之作 |
| 活動分野 | まちづくり |

### 課題・背景

いわき市中之作・折戸地区は、津波被害による建物解体と高齢化による空き家増加で、地域コミュニティは大きく断絶している。また、建物解体によりかつての美しい港町の風景が減っている。一度壊された風景の再生は非常に困難であると考え、津波被害を受けた古民家を修復し、地域コミュニティのために活用してきた。

### 目的

津波被害による建物解体と住民減少によりコミュニティの維持が難しくなり始めている地域の再生を図るために、この地域のコミュニティに参加できる新しい住人となる移住希望者を集める。空き家所有者に向けたリーフレット等を作成し、交流の場を設け空き家バンク設立に関心を持ってもらい、移住希望者とのマッチングを目指す。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

**空き家バンク設置に向けた取組み**

地域住民、移住希望者などに中之作プロジェクトの取組みを伝えるパンフレット、リーフレット（清航館通信）作成配布。地域の空き家所有者の情報を得るため、住民への聞き込みも行っている。

また、イベント開催時には空き家に関するアンケート調査をした。




パンフレット作成

### 〈取組2〉
**素人でも可能な再生方法を学ぶ「DIY教室」の開催**

昨年度に引き続き、毎週日曜日に素人向けDIY教室をほぼ毎週日曜日に開催。DIYに興味のある方、建築を学んでいる高校生、将来建築関連の仕事を目指す中学生も参加。今年度は家具作りなど女性が参加しやすい作業などもあり、女性の参加者が増えた。参加人数は延べ500人を超えた。



月見亭DIY教室



つるし雛飾りまつり

### 〈取組3〉
**中之作のライフスタイルの提案「地域とのつながりをつくる」イベントの開催**

農園で収穫したさつま芋を使い開催した【収穫祭】には約100人の参加があった。年末には【正月しめ縄飾り教室】を開催した。

恒例となった、中之作つるし雛飾りには三日間で3,000人を超える来場者があり賑った。4日目には地元の学校や幼稚園、福祉施設の団体向けに時間貸し切りで受け入れ、約100人の来場があった。

## 事業の成果

空き家を活用したコミュニティカフェ「月見亭」のオープンに向け、年間を通してDIY教室を開催した。毎回参加する方も増え、工具の使い方も慣れ作業スピードは速くなったが、人力での資材搬入や素人では難しい作業も多く、完成が予定よりも遅れた。

昨年度に引き続き空き家バンク設立への準備を進めてきたが、移住希望者はあるものの空き家所有者の同意が得られない事からマッチングには至っていないのが現状。

つるし雛飾り祭りでは、一般公開日とは別に予約者限定日を設け近隣の保育施設、小学校、福祉施設入居者の受け入れをし、とても好評だった。月見亭農園では現在タマネギとニンニクを栽培中。収穫した作物を使った料理を月見亭で提供する予定。

## 今後の展開

3年間続けたDIY教室で改修した建物「月見亭」が地域住民の集まる場所コミュニティカフェとして利用される。【月見亭】では地域住人が集まり、地域問題や空き家情報を共有し話し合う場として活用する予定。高台の粗末な空き家を活用する事で地域に新しい場所が生まれ、人が集まることでこれまで滞っていた「空き家バンク」の取り組みを軌道に乗せる事につなげたい。

県産米消費拡大プロジェクト　～米の多様性と福島の現実～

# 福島県米穀肥料協同組合青年部

| 団体概要 |
| --- |
| 〒963-8871 福島県郡山市本町一丁目1-17<br>TEL 024-953-8061　FAX 024-953-8062<br>E-mail info@fks-beihi.jp<br>URL http://fks-beihi.jp |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 福島、東京、神戸 |
| 活動分野 | その他 |

## 課題・背景

福島県は東日本大震災によって多大な物理的被害を受けただけでなく、いわれない風評被害に見舞われている。その影響は県産米にも及び、市場での選択性を著しく低下させている。

もとより国内の米の消費量は減少し続けている中、風評により「量販店の常設棚に置かれていない」等の消費者との接触機会を失う大きなハンデキャップは、県産米が市場から淘汰される決定打になりかねない。この現状に強い危機感を持ち行動を起こす必要がある。

## 目的

震災から7年、農水省が初めて行った県産農産物の流通実態についての調査結果によって、取扱量の減少、回復しない価格水準、2割もの消費者から「安全性に不安」の声等、風評払拭が進んでいない現実が明らかとなった。

風評払拭のマスコミ施策の多くは消費者など実需者がターゲットであった。本事業ではまだ自分で米を購入する機会がない（＝米に対する消費行動が定まっていない）学生に風評被害と県産米の良食味を啓蒙する。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

東京農大の学生を福島に招き、以下の日程をおこなった。

- 福島県への表敬訪問
  内堀雅雄福島県知事と意見交換
- 農産物検査・全量全袋スクリーニング検査体験
- 曙酒造見学
- ふくしま逢瀬ワイナリー見学
- 水稲の圃場見学
- ぶどう農園見学



〈取組2〉

東京農業大学国際食料情報学部国際食農科学科1年生110余名を対象に総合演習米概論を実施した。
パナソニック株式会社「ライスレディ」の協力。

●座学（60分）
①県産米の説明
（震災後の状況と対応）
②米が食卓に届くまで（流通）
③米の美味しさの本質（炊飯機業界）

●ワークショップ（120分）
①農産物検査体験
②食味官能評価試験の実践



## 事業の成果

取組1では、広報部員を務める同学科2年生2名を福島県に招いた。前年に受講した米概論を知識の基盤に、福島県への表敬訪問、農産物検査と全量全袋スクリーニング検査の体験をした。

内堀雅雄知事との意見交換では、風評払拭について「内側（県内）の力だけではどうしても足りない部分がある、県外の学生に学んでもらうことに意義を感じる」と言葉をいただいた。学生はいずれ社会人となり、一人ひとりが知事の言うところの「外側の力」となる。本事業の意義を再確認する機会となった。

学生は、学内に戻った後、自身の体験を広報部内で共有した。その結果、取組2の米概論に、2年生有志6名が参加し、取組1で得た知見を1年生に伝播した。米概論の講義では、将来、日本の食と農に様々な形で関わる学生達に、県産米への興味の醸成や農産物に対する正しい理解及び情報発信を啓蒙した。

## 今後の展開

準備事業を含め2年目となる事業を成功裏に終え、東京農大やパナソニック㈱との連携体制が構築された。

ここが一つの岐路になるが、あえて同様の形で継続するのではない道を模索する。部員一人ひとりが経営者（幹部社員）であるという当組織ならではの強みを活かすことができるからである。

次年度の大学のカリキュラム構築は4月頃となる。それまで大学、部内、関係者と忌憚のない意見交換を重ねていく。

富岡町の未来を担い、富岡を語り継ぐ人材育成プロジェクト

# 特定非営利活動法人 富岡町3・11を語る会

| 団体概要 |
| --- |
| 〒979-1111 福島県双葉郡富岡町小浜字中央416番地<br>さくらモールとみおか内事務所1号<br>TEL・FAX 0240-23-5431<br>E-mail kataribe_office@tomioka311.com<br>URL www.tomioka311.com |

| 活動地域 | 富岡町 |
| --- | --- |
| 活動分野 | 社会教育<br>まちづくり<br>子どもの健全育成 |

## 課題・背景

富岡町における帰還者向けの町内コミュニティは、いまだ十分とは言えない。また町内には廃炉作業員など復興関連の移住者も増加しているが、町民との接点の場は少ない。町内のボランティアやイベントに積極的に関わる町内外出身の若者も増えている一方で、彼らが地元の歴史や文化を知る機会は限られており、コミュニティの構成要員に取り込めずにいる。さらに、避難生活の続く多数の町民が町への関心を失いつつあることも危惧される。

## 目的

富岡町内で再開された小・中学校の児童生徒が、震災体験や町の文化・歴史伝承を行う語り人（かたりべ）と共に、朗読教室・演劇活動を通して表現力を身につけ、新たな町内コミュニティ創出の原動力となることを目的とする。また、すでに帰還した町民を中心に、町外に避難している町民および新規移住者・町外者に、富岡町の現状と伝統・文化を語る伝えることで、新たな富岡町のコミュニティを作るきっかけづくりを目指す。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

**≪とみおか表現塾の開設・運営≫**

大人のための音読教室は「美文朗読」等を教材に月二回開催。子どものための音読教室は毎週月曜の放課後、音読や劇あそびなどで表現力を育てる活動を実施。表現塾での成果は、11月に開催された富岡町福祉まつりにて多くの来場者に披露された。さらに子ども達は表現する喜びを知り、七夕会やクリスマス朗読会など活動の幅を広げ、加えて町の防災無線においてもアナウンスを担当する活躍をみせている。



「大人のための表現塾」

### 〈取組2〉

**≪演劇キャンプin富岡の開催≫**

9月15～17日の3日間、専門家を招き表現力育成向上のキャンプを実施。ミュージカル・朗読・即興劇・放送劇の4講座で40名が受講。最終日に発表会が催された（観客65名）。地元をより知るための震災学習プログラムも組まれ、現地の見学・研修を行った。受講した子どもたちは、講座を通じて表現する難しさを体験することができた。また避難住民が見学に訪れるなど、町民同士の交流にもつながった。



「発表会 ミュージカル講座」



「動画制作中」

### 〈取組3〉

**≪町民によるPR動画製作プロジェクト≫**

町民自らが制作・出演に携わり短編の動画製作を行う。“高齢者編”では、語り人会員が主体となり震災を通して富岡町という自らの故郷に向き合う姿を追う作品。“子ども編”では、学校生活の中での思い出づくりとして、卒業する6年生と下級生とのふれあいを記録。制作過程では参加者の生き生きとした積極的な姿が垣間見られた。動画はWEBでの公開と、今後の語り人口演時の上演を予定している。

## 事業の成果

現在の富岡町は一部帰町が始まり、新たな創生期を迎えている。人口またその構成の激変により、これまで以上に郷土愛を持った町民の存在が必要とされている。表現塾の継続により参加者の表現力が向上しており、震災体験のみならず、郷土の文化・歴史を語り継ぐ人材育成の基盤づくりにつながったと考えている。その成果は当会が1月に主催した『町民劇』においても遺憾なく発揮され、さらに子どもたちにおいては、防災無線でのアナウンス起用など、取り組みが行政にも認められる結果となった。また演劇キャンプの開催により、他市町村からも受講生を受け入れることで、外部の富岡町への関心が高まり、町民との新たな交流のきっかけとなっている。これは町づくり創生期の町民にとってひとつの刺激ともなっている。子どもから大人まで町民主体で作成したPR動画は、今後富岡町からの情報発信のツールとなり、避難中の町民との絆づくりにもつながるはずである。

## 今後の展開

今後は富岡町での事業の継続に加え、他の自治体での展開も視野に取り組みたい。「とみおか表現塾」の形態を、広野町・楢葉町・川内村などの近隣自治体を対象に実施していきたい。また発表の場は、近隣自治体の文化サークルとの合同発表会の形式にすることで、双葉郡内の町村間での交流促進の一役を担えればと考えている。学校を軸にした地域コミュニティの形成も継続し、双葉みらい学園高校との連携がすでに具体化しつつある。

スタディツアーや農業体験による関係人口の創出と
新しいコミュニティ促進事業

# 特定非営利活動法人 福島県有機農業ネットワーク

| 団体概要 |
| --- |
| 〒964-0871 福島県二本松市成田町1-511<br>TEL 0243-24-1795　FAX 0243-24-1796<br>E-mail info@fukushima-yuuki.net<br>URL http://fukushima-yuuki.net/ |

| 活動地域 | 福島県 |
| --- | --- |
| 活動分野 | 保健医療福祉・まちづくり<br>農林漁村中山間<br>文化芸術スポーツ・環境保全<br>災害救援・経済活性化<br>職業能力雇用・連絡助言援助 |

## 課題・背景

県内の農業は、富岡町、浪江町など避難解除になって間もない地域は復興のスタートラインにやっと立った段階である。しかし震災からの時間の経過により福島に関する情報が減る傾向にあり、多くの人の関心が薄れてきている。あらためて浜通りの農業の状況を広く知らせる必要があり、復興の進捗に即した対応が必要である。

## 目的

農業の多面的機能（景観の維持や人と人とをつなぐコミュニティ、相互扶助）を活用し、スタディツアーや農業体験を通して首都圏の消費者・支援者との絆を深め、主に浜通りの農村地帯の再生に活かす。さらに県内の農家をクローズアップした情報発信を強化し、首都圏で関わる人＝関係人口を増やす。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

帰還困難区域の大熊町山間部にて、牛の放牧による農地維持を目指している「もーもーガーデン」を訪問し、圃場の整備などの農業体験をした。



〈取組2〉

農家を巡るツアーおよび東京交流会を実施

- 12月に広野町から浪江町にかけて農家を巡るツアーを実施し、首都圏の消費者と一緒に避難解除後の各地の農業の復興の進捗状況を直接農家に訪れてヒヤリングした。
- 2月に浜通りの農家を東京に招いて、ツアーに参加した人たちや首都圏の支援者とともに交流会を実施した。






〈取組3〉

福島で暮らす農業者の自然体の姿を小冊子やホームページで発信した。

## 事業の成果

復興状況を発信力のある首都圏の消費者に見てもらうことで、福島の復興の進捗や課題、対策を多くの人に伝えることができた。

実際に農家と交流することで、農業の問題を体感できるとともに、農家とのつながりも増え、風評払拭や交流拡大につながった。

参加者同士のつながりを生むことができた。

福島で暮らす農業者の自然体の姿を小冊子やホームページで発信することにより、福島の農業の魅力を風評払拭とは違う福島の本来の魅力という観点で発信できた。

## 今後の展開

ツアーや交流会でつながった消費者同志が問題意識や目的を共有することで、あらたな福島を応援するコミュニティ（ふくしまをテーマにした多重的なコミュニティ）に発展させていき、自主的に福島の農家や特定の地域と交流する形にもっていきたい。

# 請戸小・学校物語の福島への継承

## 特定非営利活動法人 団塊のノーブレス・オブリージュ

| 団体概要 | |
|---|---|
| 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-4-14<br>2階　ラウンジHello内<br>TEL・FAX 090-5798-8393<br>E-mail uchida@dankai.jp<br>URL http://dankai.jp | |

| 活動地域 | 東京都、浪江町 |
|---|---|
| 活動分野 | まちづくり<br>災害救援 |

### 課題・背景

浪江町にある請戸小学校を題材にして5年目を迎えた。あの津波の中で子どもたち全員が助かったとの事を伝えたく思った。絵本請戸小学校物語を完成させ、紙芝居やプロモーションビデオを作成した。今年度は紙芝居を発展させ、子どもたち約40名による創作紙芝居を制作した。また、紙芝居の語り部は当時6年生の女性のみであったが、今年度は16名の子どもたちにこの物語を継承してもらえる事となった。

### 目的

震災遺構として請戸小学校が残される公算が大きくなってきた。今後、遺構としての請戸小を運営するにあたり、来場者に請戸小で起きた事実を理解していただかねばならない。

このために、絵本を置いたり、当時のビデオを流したり、また紙芝居を上演したりする必要がある。更に子どもたちが避難した経路を体験してもらうためのパンフレットも準備した。

また、大きなイベントがある時には40名の子ども達と創作紙芝居を上演する。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

**創作紙芝居請戸小学校物語の制作**

本来の紙媒体である紙芝居は既に10回以上上演した。これを更に規模を大きくし、紙芝居に合唱などの音楽、スクリーン映像や効果音などを入れ拡張した創作紙芝居を制作した。この中心となっているのは“福島しあわせ運べるように合唱団”の子ども達である。請戸小学校の子ども達が避難したその体験を昨年3月に追体験し、この物語の主人公となって貰っている。



### 〈取組2〉

**紙芝居語り部の養成**

“紙芝居請戸小学校物語” を引継いで上演するためには子ども達自身に語り部となってもらわねばならない。

この語り部を募集した所、16名もの方から請戸小物語を広めたいと研修に参加いただいた。

こちらから認定書を授与させてただき、今後請戸小学校が震災遺構として残された場合、紙芝居の上演などをこの子ども達が語りをすることとなると考えている。





### 〈取組3〉

**制作物のアーカイブ化**

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター（FURE）と連携し、我々の制作した請戸小学校に関する絵本、紙芝居、映像記録“先生と子ども達の証言” などを既に収蔵していただいているが、今回更に創作紙芝居も収納していただく予定である。今後はイノベーション・コースト構想と相まってアーカイブセンターが請戸小学校に隣接されるので、多くの方に見ていただけることと期待している。

## 事業の成果

我々首都圏のNPOが5年前、請戸小学校を訪問した時に受けた衝撃を伝えたいと絵本、紙芝居、映像ビデオなどの形で紹介してきた。

全国に散らばった浪江の方々にこの絵本などを読んでいただき、多くの反響を得た。また、小学校などで補助教材としてこの絵本や紙芝居の上演も実施してきた。

今年度は更に多くの方に一堂に介して見て頂きたいとの思いで創作紙芝居を制作した。

これには二本松在住の佐藤敬子先生のお力なしでは実現できないことであった。

先生に教えを受けている子ども達“福島しあわせ運べる合唱団”が参加してくれて、創作紙芝居は大盛りあがりであった。

更にこの子ども達が紙芝居の語り部になりたいと16名もの応募があった。これには横山和佳奈さんの存在が大きい。当時請戸小6年の彼女が大学生となった今、紙芝居の語り部として紙芝居を上演し、それを間近に見た子ども達が和佳奈さんに憧れを抱いた事が大きい。そのような活動を実施できたことに感謝している。

## 今後の展開

請戸小学校を素材として5か年実施して来たが、首都圏のいる我々の役割はほぼ終焉を迎えたのではないかと思っている。この活動の継続は現地の方々、実際には浪江町やその関係者にこの役割を担っていただきたいと考えている。具体的には “福島しあわせ運べる合唱団” を中心に紙芝居や創作紙芝居の上演、絵本頒布などは版元の第一印刷さんなどにお任せ致したいと考えている。

# 勿来ひと・まち未来会議

| 団体概要 |
| --- |
| 〒974-8223 福島県いわき市佐糠町東1-19-5<br>TEL・FAX 0246-77-1590<br>E-mail hito-machi@coral.ocn.ne.jp<br>URL hito-machi@coral.ocn.ne.jp<br>FBページ有り |

| 活動地域 | いわき市 |
| --- | --- |
| 活動分野 | まちづくり<br>文化芸術スポーツ<br>環境保全<br>地域安全 |

## 課題・背景

2018年3月に勿来地区に復興公営住宅（勿来酒井団地）が完成し、順次入居が開始されている。しかし、避難先である勿来地区の住民の方と入居者の軋轢等があり、他地区の復興公営住宅内では新たな友好関係を築くことができないということが課題として挙げられている。この課題を解決するにあたり、住民同士の自然な交流を促進させることができるような活動を行っていく。

## 目的

- 勿来酒井団地入居者と勿来地区の住民による両住民の交流を促進させること
- 高齢者のストレス解消や健康を維持させること
- 勿来地区やいわき市の魅力を再発見すること
- 外出機会を増加させること
- 団地内交流を行うこと

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

**「くぼたんけん」**

2018年6月23日（土）に「くぼたんけん」というまちあるきイベントを実施した。当イベントは、勿来酒井団地にて開催し、多くの参加者が集まる「勿来酒井団地オープニングセレモニー」と同日に屋台企画として開催した。勿来酒井団地を出発し、商店街や公共施設のある窪田地区を歩くことによって、勿来酒井団地入居者と勿来地区の住民による両住民の交流促進、新たな生活拠点の認知となることを目的とした。



### 〈取組2〉

**「グラウンドゴルフなこそカップ」**

2018年9月30日（日）に、グラウンドゴルフ大会を実施した。イベント当日は、32名が参加した。参加者を8人ごとの4チームに分け、チーム対抗戦とすることで、チーム内のメンバー間での交流を促進させた。イベント終了後のアンケートでは、「参加者との交流が深まった」と全体の97%が回答し、「また参加したい」と全体の100%が回答した。





### 〈取組3〉

**「いわきの海を五感で楽しもう！勿来・酒井交流会」**

2019年1月26日（土）にいわきを巡るバスツアーを開催した。イベント当日は34名が参加し、いわきかまぼこ工房で「たけちくわ」を手作りしたり、いわきマリンタワーやいわきららみゅうといったいわき市の観光施設をバスで巡ったりした。イベント終了後のアンケートでは、「参加者との交流が深まった」と全体の79%が回答し、「また参加したい」と全体の100%が回答した。

## 事業の成果

3つのイベントとも当初の予定から多少の変更点はあったが、予定通り実施することができ、延べ参加人数は66名である。イベント後のアンケート調査では、参加者との交流ができたと回答した方は全体の90%以上、また同様のイベントに参加したいと回答した方も全体の100%いたことから、コミュニティ形成を繋げることができた。また、今年度実施した事業に複数回参加してくれる方もいたため、求めていた成果を得ることができた。

さらに、多くの参加者からこのような事業を継続的に行ってほしいという声をいただき、求めていた成果を得ることができた。

## 今後の展開

今後もこのような交流イベント（内容は異なる）を継続して実施することで、さらなる両住民間の交流機会を促進させ、団地内外の友好関係を創出していく。最終的には、住民同士が主体的に交流していくことを目標とする。

# 福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」

## 学校法人 山口学園 ECC国際外語専門学校

| 団体概要 |
| --- |
| 〒530-0015 大阪府大阪市北区中崎西2-1-6<br>TEL 06-6311-1446　FAX 06-6311-1440<br>E-mail yaraya@ecc.ac.jp<br>URL http://kokusai.ecc.ac.jp/ |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 大阪 |
| 活動分野 | 社会教育 |

### 課題・背景

●取り組みをはじめた背景

東日本大震災発生時に、当時の学生が「僕たちに何かできる事はありませんか？」という言葉から、在学中に得た学びを活かして福島県の力になれることを考えたことがきっかけ。

●課題

福島県を実際に訪れ、風評や風化が今後の課題と知り、風評ではなく、自分達の五感で確かめた「ふくしまの魅力」と「ふくしまの今」を発信すること。

### 目的

●福島県の現状把握と正確な情報発信により、風評・風化防止に取り組む。
●若者の情報発信力で、同世代に正しい理解と食の「安心・安全」をPRする。
●在学中に得た専門力とホスピタリティ精神を活かす。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

**《福島県視察「スタディツアー」》**

2018年9月11日～13日に、チャリティカフェを運営する学生有志16名で、福島県を訪問（2泊3日）。津波で被災した福島県沿岸部等を視察して「ふくしまの今」を体感し内堀知事にも報告しました。参加学生からは「福島県がぐっと身近に感じた」と、ポジティブなフィードバックが多かったです。



### 〈取組2〉

**《福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」の開催》**



ホテルコース2年生が在学中に得た専門力とホスピタリティ精神を活かし、5日間限定のチャリティカフェを運営。カフェ内では福島県視察で得た福島の現状を情報発信したり、福島の水や牛乳などを使って学生自らが開発したメニューを提供し、美味しさと安全性をPRできました。本年度は多くの企業・団体のご支援をいただき、1,228名の来客があり、売上の930,775円は、平成31年2月6日に東北地方太平洋沖地震に対する寄附金として、福島県に寄付しました。

### 〈取組3〉

**《情報発信》**



●SNSを利用した、情報を発信。

Twitter: @RapportCafe

Facebook: ECC Hotel International Café Rapport

Instagram: café_rapport

●ラジオ福島特番　公開生放送

12月8日(土)13：00～15：00

ラジオ福島・公開生放送

「なすけんパーティー真冬の**Long trip to** 大阪やっちゅうねん♪ **in** カフェ・ラポール」

福島県出身なすび氏、ラジオ福島アナウンサー深野健司氏を迎え、カフェから福島県へラジオ公開生放送を初めて取り組みした。福島県の皆様から多くのメッセージをいただき、学生の活動の励みになりました。

## 事業の成果

福島へ実際に足を運び、五感で感じたふくしまの魅力を発信する姿に、毎年、お客様から温かいお言葉を掛けていただけます。今年は、学生が、積極的に、福島県産品を用いて、オリジナルメニューを考案し、協賛企業や団体様のお力添えだけに頼りきった形から「カフェ・ラポール」の独自性もPRできる運営スタイルへと、一歩踏み出せたように感じます。また、今年は、歴代初となる日本酒の販売を行えたことで、今までのターゲット(主婦層(子育て世代))に加え、男性へのPRも行えたことは、大変効果的でした。

5日間で1,228名様をお迎えし、売上合計の930,775円は、平成31年2月6日に東北地方太平洋沖地震に対する寄付金として、福島県に寄付いたしました。

## 今後の展開

本事業を開始以来、運営の形や規模を変えながら、今年で8年目を終えました。本年度は、ラジオ福島の公開生放送を行ったことにより、福島県の皆様にも、私達の活動を知っていただけたるきっかけとなりました。今後は、更に多くの県民の皆様、県内企業様と共働できるような形にも、進化していきたいと思っております。よって、今、活動を終えるという選択肢は、私達にはございません。一回一回の寄付金額は微々たる物ですが、今後も末永く支援を続けたいと思っております。

## いいたてコミュニティの再生　～心とからだの健康のために～

# 特定非営利活動法人 ふくしま再生の会

| 団体概要 |
| --- |
| 飯舘事務所 〒960-1815 福島県相馬郡飯舘村佐須字滑87<br>東京事務所 〒166-0001 東京都杉並区阿佐谷北1-3-6-2F 1<br>TEL 03-6265-5850　FAX 03-6265-5859<br>E-mail desk@fukushima-saisei.jp<br>URL http://www.fukushima-saisei.jp/ |

| 活動地域 | 伊達市・福島市・飯舘村 |
| --- | --- |
| 活動分野 | 保健医療福祉<br>まちづくり<br>文化芸術スポーツ |

## 課題・背景

ふくしま再生の会は2011年6月から原発被災地の飯舘村の再生を目指した活動をしています。村民・ボランティア・専門家が協働して放射線被害に対応する各種の測定・各種除染の方法を探りながら帰村後の生活と産業の再生の総合的な試みに取り組んでいます。当該支援事業助成を受けた「健康・医療ケアチーム」の活動は、2015年から伊達東仮設住宅と松川第一仮設住宅で開始。避難解除後の2017年には、同様の活動を村内佐須地区で始め、2018年6月には飯舘村民生・児童委員協議会、飯舘村老人クラブ連合会と連携し、飯舘村全域の村民に広げた。

## 目的

「健康・医療ケアチーム」は内科医・精神科医・看護師・管理栄養士・社会福祉士・介護福祉士・臨床心理士などで構成。①伊達東仮設住宅談話室と松川第一住宅談話室でそれぞれ月一回、個別ケア、健康相談を実施。②避難解除後は、飯舘村の佐須公民館・旧佐須小学校で佐須地区の村人へのケア、③さらに村の施設を使って全地区村の人たちへのケアを加えた。

活動の主目的は、「健康相談」、「栄養相談」、「足もみ・マッサージ」、「カイロプラクティス」「よろず相談」などを行い、村民同士の語らいと交流が生まれるようにすることである。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

**「健康いちばん!の集い」**

2018年6月から飯舘村民生児童委員協議会・飯舘村老人クラブ連合会・ふくしま再生の会が協働し、社協の協力を得て、2か月に一回村の施設「いちばん館」で実施。多い時には70人近い人が集まる。帰村した人だけでなく、村民であれば誰でも参加できる。「足湯・足もみ・爪切り」や「カイロプラクティス」、免疫力を高める昼食の提供、健康に暮らすための講話と個別相談をし、みんなで健康寿命を延ばしていくための活動。



### 〈取組2〉

**「久しぶりに集まって、みんなで楽しく過ごしましょう」**

避難解除後の2017年5月から毎月一回、飯舘村佐須地区で佐須行政区、佐須老人クラブ、ふくしま再生の会との共催で実施。(2018年6月以降は2か月に一度の実施)

佐須地区の佐須公民館/旧佐須小学校でコミュニティ支援を目的とした交流サロンを目指す。プログラム前半は老人クラブのレクリエーション、後半は健康相談、食事指導、マッサージなどの個別サービスを実施。





### 〈取組3〉

**「身体とこころを健康に保つ相談会」**

松川第一仮設住宅で2015年から継続している。2019年3月には仮設住宅は閉鎖となるが、現時点でも仮設住宅に留まっておられ、2月末までケアを続けた。最終回の2月25日には5人の方が談話室での活動に参加された。ストレッチ・足湯・足もみをしつつ、1週間早いひな祭りをお祝いした。2月時点で42回を重ねた。

## 事業の成果

①仮設住宅を引き上げ飯舘村に帰った方は、村の「いちばん館」と佐須公民館／旧佐須小学校での活動に参加されている。

②足のマッサージとカイロプラクティスで足のむくみ、腰・肩の痛みに効果があることを実感されていることが村内での活動に参加される動機になっている。そして仮設住宅での友達と会っておしゃべりを楽しみたいというのも参加への大きな理由の一つ。

③「健康・医療ケアチーム」の強みは医師・看護師・管理栄養士・社会福祉士・臨床心理士などで構成されているので多面的な「心とからだの健康づくり」の支援ができる。

③活動の主体がふくしま再生の会（NPO）単独の活動でなく、飯舘村民生児童委員協議会・飯舘村老人クラブ連合会の協働があること。さらに社会福祉協議会の協力が得られたことで村民の方々の信頼を得た。今後も連携して活動することが決まった。

## 今後の展開

今後の展開について

仮設住宅への訪問は今春で終了し、今後は飯舘村内での活動に軸足を移していく。

①佐須地区に2019年3月宿泊施設が完成し、宿泊施設を村内外の人々に利用してもらうよう多様なイベントを計画中である。たとえば、交流事業、村内ツアー事業、農業体験などを実施していく。この「いいたてコミュニティの再生～ 心とからだの健康ために～」の活動もそれらと連動して活動を広げていく予定である。

②2019年度村の施設「いちばん館」で実施していた「健康いちばん!の集い」については、社会福祉協議会の協力の下、主催の飯舘村民生児童委員協議会・飯舘村老人クラブ連合会・ふくしま再生の会が偶数月に一度の割合で活動を続けることが決まった。

# プロジェクトFUKUSHIMA!2018

## 特定非営利活動法人 プロジェクトFUKUSHIMA

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-8032 福島県福島市陣場町5-30<br>いげた陣場マンション202号<br>TEL 024-573-8385　FAX 024-573-8386<br>E-mail profukushima@gmail.com<br>URL http://www.pj-fukushima.jp |

| 活動地域 | 福島市 |
| --- | --- |
| 活動分野 | まちづくり<br>観光振興<br>文化芸術スポーツ<br>経済活性化 |

### 課題・背景

東日本大震災から時間が経過すると共に複雑化・進化する福島を巡る困難な状況の中でこそ、福島の現況を再確認し、どう向き合うか議論することが重要であり、その視点と方向性を人々に示唆する力を秘める音楽や詩やアートなど「文化」の力が必要だと考えています。祭りや独自のメディアによる発信を通して福島から生まれる「文化」が、福島で希望を持って生きていく原動力となるように活動を継続しています。

### 目的

盆踊り、大風呂敷、「スクールFUKUSHIMA!」の定期開催を継続することで、福島から文化を発信し福島をポジティブな場所に変えていく、現在の福島を発信するということを目的に、震災後の福島で様々な活動を続けています。また、イベントの会期の長期化、音楽家の育成や、世界に福島の文化を発信する国際交流、冊子の配布など、様々な面で広がりを持たせることを目的に活動を行っています。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

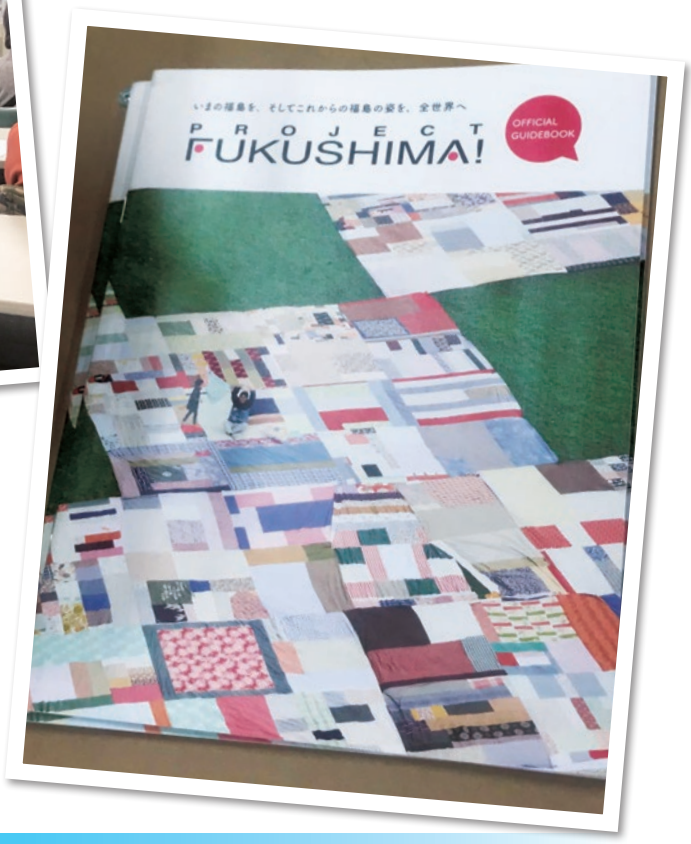
毎年8月に開催するフェスティバルを継続開催しました。毎年好評で福島の夏の風物詩となりました。本年度は週末の2日間の開催とし、これまで以上に県内外から多くの参加者が集いました。出演者には福島からの移民が広めた「福島音頭」が文化として根付いているハワイから招聘し国際交流も行いました。盆踊りや余興、祝祭性に富んだ装飾などを福島駅前全体に施し、地域全体を楽しみながら福島の魅力を知ってもらいました。



〈取組2〉

昨年度も開催したスクールを今年度は連続講義で開催しました。2019年に50周年を迎える「福島わらじまつり」の総合プロデュースを音楽家・大友良英とともにプロジェクトFUKUSHIMA!が担当することになったことを受けて、祭りを様々な角度から捉え直す機会として「祭りの再生」（全7回）をテーマに開講しました。講師にはわらじまつり関係者やフェスティバルFUKUSHIMA!関連のアーティストを招聘しました。






〈取組3〉

プロジェクトの継続に合わせて、プロジェクト説明用の冊子を更新、印刷を行いました。今年度の新たな活動である「清山飯坂温泉芸術祭2018」や、県外の活動も網羅し、県内外の各所で多くの人々に配布することができました。

## 事業の成果

「フェスティバルFUKUSHIMA!2018」は2日間の土日の開催とすることで、多くの参加者に楽しんでいただけました。また、会場となる「街なか広場」から、駅前通りをパレードで練り歩きを開催し、これまでよりもより地域に広がりを持った活動を行うことができました。

「スクールFUKUSHIMA!2018」では「祭りの再生」をテーマに連続講義を開催することで、回を重ねるごとに参加者数が増加する、よい傾向を生み出すことができました。「福島わらじまつり」との連携を取ることで、昨年度よりも多くの地域活動団体の方々と協働することができ、来年度への発展が期待できる結果となりました。「冊子の第2版の作成」については、最新のプロジェクトの取り組みや今後の展開についても記載することができました。今後もプロジェクトを周知させる為のツールとして活用していきます。

## 今後の展開

来年度は「福島わらじまつり」のプロデュースを音楽家・大友良英と共同で行うことになり、より地域に根ざした活動を行っていくことになります。このプロデュースの活動に合わせて「フェスティバルFUKUSHIMA!」も開催することで、より多くの参加者を見込めます。9回目の開催となる来年度は、10回目を見据えてより広がりを持った活動を展開していきます。

# 寄付文化醸成を目指した遺贈寄付等説明会及び研修会

## 一般財団法人 ふくしま百年基金

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-8062 福島県福島市清明町1-7 大河原ビル2F<br>TEL 024-573-2640　FAX 024-573-2641<br>E-mail info@cf-fukushima.org<br>URL https://www.cf-fukushima.org |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 福島市 |
| 活動分野 | その他 |

### 課題・背景

復興を力強く進める為NPO等が持続的に活動していくこと、その為にもNPO等が主体的に資金調達に取り組み、市民や企業等が活動への共感に基づき資金的に支える文化（寄付文化）の醸成が求められている。寄付文化の最たるものとして「遺贈寄付」が報道で特集されるなど全国的にも注目されており、本県でも機運が高まっている。一方、県内では専門の研修や相談窓口がなく、例え関心があっても実際の行動に繋がっていない現状がある。また本県は震災と原発事故の影響もあり、相続による県外への資金流出超過となっている。寄付文化を醸成し、志に基づく資金を地域内で流通させることは、本県の復興、NPO育成に必要不可欠だ。

### 目的

本事業は、県内中間支援組織や各種専門機関と連携して遺贈寄付研修等を開催し、NPOや市民等の具体的な行動を喚起することで、本県に寄付文化の礎をつくることを目的としている。税理士・弁護士等の遺産相続に関する専門機関、遺贈寄付啓蒙を目的に設立された一般社団法人全国レガシーギフト協会等の協力を得ながら本県の実情に合わせた研修プログラムを行う。また県内に遺贈寄付相談窓口の設置をする為の準備として、県内外の各種専門機関（弁護士会、税理士会等）との具体的な連携を進める。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

**研修開催（10月～11月）**

①共通編研修：新しい社会的資金について学び、今後の活動へ活かそう！（開催地：南相馬市、いわき市、会津若松市、白河市、須賀川市）

②発展編研修：3-5年後の成長戦略を考え、資金・資源の活用計画をつくろう！（開催地：須賀川市）

③特別編研修：遺贈寄付の相談を受ける人が知っておきたい大事なこと（開催地：福島市）



〈取組2〉

**ふくしま百年基金シンポジウム2018開催**

終活や遺贈寄付等の専門家、返礼品競争でない新しいふるさと納税の先進地から専門家を招聘。

基調講演1．遺贈・相続寄付～終活で安心？縁を集める集活してみませんか～（星野哲氏/立教大学社会デザイン研究所研究員）

基調講演2．ふるさと納税を活用したNPO支援（岩永幸三氏/認定NPO法人IDDMネットワーク副理事長、佐賀県男女参画・女性の活躍推進課課長）



〈取組3〉

**相談窓口設置に向けた関係者による協議**

●行政、日本政策金融公庫、行政書士会、税理士会、NPO団体、中間支援団体で形成するソーシャルビジネスネットワークにおいて、遺贈寄付相談窓口の設置についての協議を行った。

●東北税理士会研修に参加し、福島県内の連携体制構築に向けた協議を行った。

## 事業の成果

●全国的な遺贈寄付研修をベースに、コミュニティ財団である弊財団が把握している本県ならではの実情を踏まえた新しい専門的研修プログラムを県内で初めて開催、県内NPO等関係者が新たな知見を得た（受講者は延べ59名、うち県外からの受講者1名）。

●寄付文化醸成をテーマにした本格的なシンポジウムを県内で開催、県内NPO等関係者が新たな知見を得た（参加者は24名、うち県外からの参加者4名）。

●遺贈寄付に関する専門的かつワンストップの相談窓口設置に向けて、必要な関係者による協議を行った。

※遺贈寄付研修・シンポジウムにおいては、開催テーマとなる遺贈寄付やふるさと納税によるNPO等支援について初めて聞く参加者も多く、今回の開催によって県内関係者の知見がより広がることとなった。また、近隣県からの参加もあったことから遺贈寄付への関心の高さが再認識された。

## 今後の展開

本事業を重要なひとつのステップとして、次年度以降も県内の寄付文化醸成に資する様々な取り組みを推進する計画がある。特に遺贈寄付については、本県にも専門的かつワンストップの相談窓口の確立を進め広く理解や関心を喚起していくことで、幅広い県民のニーズ、NPO等の発展に貢献していきたい。寄付文化の醸成は一朝一夕に達成できる目標ではないが、寄付者の想いをNPO等の活動現場に繋いでいく取り組み、地域一体となってふるさと・ふくしまの復興や地域づくりを支えていく取り組みを推進していく。

# 事業者データベース＆マッピング事業

## 特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ

| 団体概要 |
| --- |
| 〒976-0042　福島県相馬市中村字塚田72<br>TEL 0244-26-9127　FAX 0244-26-6567<br>E-mail t.ayu@somamirai.net<br>URL https://www.facebook.com/somamirai/ |

| 活動地域 | 相馬市 |
| --- | --- |
| 活動分野 | まちづくり<br>経済活性化<br>その他 |

### 課題・背景

東日本大震災により相双地域は津波被害のみならず放射能による甚大な被害を受け、地域コミュニティと共に沿岸漁業をはじめとした全産業が崩壊した。復旧から復興への移行の中で住民ニーズは「住居」「心の問題」から「仕事再開」「産業創出」へと移り変わっているが、産業の復興状況や事業者の課題が未整理状態であり、事業者同士の連携、或いは事業者と支援者とのマッチングが生まれ難く、産業創出が促進されない状態が続いている。

### 目的

事業者の「生の声」を拾い、産業復興状況と事業者の課題を整理＆情報発信し、県内外の人々に正確に現地状況を理解していただくとともに、事業者同士の連携や支援者とのマッチングにより復興を加速させること。更に、産業活性化や新事業創出の為に、「生の声」に加えて透明性のある幅広い行政のオープンデータを使用した産業と暮らしの解析と、そのデータを活用した事業者と支援企業/団体等との話し合いの場を作り連携を生み出すこと。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

**「市内事業者訪問と生の声聴取」の実施と産業復興状況＆事業者課題の把握と見える化**

- 6月～8月に県内外から合計15名のボランティアを受入れ、市内事業所を個別訪問しアンケート調査を実施。
- 事業者から、①基本的な営業情報、②震災前後の営業変化、③現在の課題＆支援要望等の生の声を収集。約54%の事業者が震災前よりも経営状況が悪化した状態で、①スタッフ確保、②風評被害払拭への支援要望が多いことが確認できた。



### 〈取組2〉

**オープンデータまとめ＆解析による復興状況の見える化（相馬INDEX2019作成と発信）**




- 事業者の要望をヒアリングした「生の声」に加えて、透明性のある幅広い行政のオープンデータを使用し、相馬市の震災からの復興状況を明確にするためのデータブック「相馬INDEX2019」を作成。
- 重要課題である人手不足や漁業の回復に係る詳細なデータの他、介護や子育て分野等のデータを追加。また、グラフに数字を入れ、経年変化をより詳細に分かるように工夫を凝らした。



### 〈取組3〉

**「そうま未来づくりミーティング」開催による新商品＆産業創出の場作り**

- 事業者同士のマッチングや連携の機会の創出をめざし、地元事業者、市役所、市民等による「そうま未来づくりミーティング」を開催した。
  - ・3月14日（木）14：00～16：00
  - ・24名参加（10～80代、農業・漁業・観光・飲食・製造・医療・福祉・公務・一般市民）
- オープンデータをもとに相馬市の現状を共有した上で、それぞれの立場から見える課題を洗い出すことができた。

## 事業の成果

- 一般ボランティアの街歩きで収集した「生の声」と、幅広い行政オープンデータの解析との両方により正確な復興状況や課題が見える化できた。
- ボランティアの方々が事業者と触れ合い、生の声を聴くことで、震災からの復興状態や課題を直接肌で感じていただくことができ、現地状況の正確な理解と情報発信や支援活動の拡大が期待できる。また、県内外への情報発信により風評被害払拭への波及効果も期待できる。
- オープンデータブック「相馬INDEX 2018」を読んでの感想アンケートの実施により、多くの方々の意見を反映させたデータブック「相馬INDEX 2019」が完成した。正確な復興状況や課題を発信し、また、事業者や市民が、より幅広い角度から、相馬市の今後を考えるきっかけをつくることができた。
- 「そうま未来づくりミーティング」の開催により、新商品開発＆産業創出への第一歩である、業種の枠を超えての相馬全体の課題の抽出と、事業者同士のつながりの強化をはかることができた。

## 今後の展開

- 事業者調査＆ヒアリングは来年度以降も継続実施が必要であり、オープンデータブックについては、一年毎の更新も重要で、最新データに基づく事業者同士の連携＆支援者とのマッチングを今後も継続させていく。
- 事業者同士で課題の洗い出しに留まらず、具体的な連携やアクションにつながるしかけづくりをめざし、「相馬INDEX2019」を活用した「そうま未来づくりミーティング」を定期的に開催していく。

# ロジックモデル普及事業

## 一般社団法人 Bridge for Fukushima

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-8061　福島県福島市五月町2-22<br>TEL・FAX 024-503-9069<br>E-mail info@bridgeforfukushima.org<br>URL http://bridgeforfukushima.org |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 福島県内 |
| 活動分野 | まちづくり<br>子どもの健全育成 |

### 課題・背景

現在、NPOや社団法人、任意団体等においては、会計の透明性や活動そのものの質の向上が求められています。本県では震災以降、非営利組織が増加傾向にあり、NPOでは921団体が認定（平成30年末現在）。社団法人や任意団体等も増えています。

海外で開発援助等を行うNGOなどでは総事業費の3～5%で外部評価を受けて「質」の向上を図るのが一般的ですが、国内ではそのような仕組みがなく、県内には外部評価ができる団体もほとんどないような状況です。

### 目的

本事業の目的は、県内のNPO等においてロジックモデルへの理解が深まり、それを作成する団体が増える事です。福島の復興は20年以上かかるといわれています。2020年に集中復興期間が終わり、資金へのアクセスが少なくなる中、2019年から開始される休眠預金は本県のNPO等にとって大きな資金源になることが想定されます。休眠預金は、ロジックモデルの作成が必要とされるとの議論がありますが、昨年の当団体の調査では県内のNPO10団体のうちロジックモデルを行った団体は0%、知っている団体は30%でした。

### 取組内容・実績

**〈取組1〉**

慶應義塾大学大学院・特別講師の伊藤健氏を迎え、ロジックモデルの普及に向け、団体内でロジックモデルを作成できる人材を増やすために、基礎研修を行いました。ロジックモデルに関心が高い2団体も一緒に参加しました。



### 〈取組2〉

伊藤健氏を講師に、団体職員がサポートに入りながら、県内のNPO9団体を対象に、ロジックモデルの作成研修（2回講座）を行いました。

**①ロジックモデル作成講座　vol.1　【10月開催】**

社会的インパクト評価の基礎とロジックモデル作成、アウトカム指標とデータ収集計画の作成を実施。

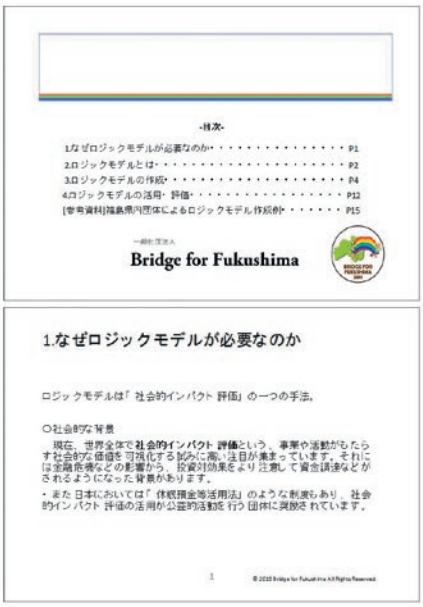
**②ロジックモデル作成講座　vol.2　【11月開催】**

前回作成後、持ち帰って再検討したロジックモデル発表と、システムシンキングによるレバレジポイントの発見を行いました。



### 〈取組3〉

NPOのみならず、基礎自治体や企業にもロジックモデルの理解や普及を促すために、ロジックモデル基礎知識や、本事業内で作成したロジックモデルを紹介するHPの作成及びハンドブックの作成を進めました。




## 事業の成果

今年度は12団体のロジックモデル作成支援を行いました。また、作成講座を2回構成とすることで、一旦各団体に持ち帰ってブラッシュアップする機会を設けました。2回目では「システム・シンキング」の考え方も学び、自団体のロジックモデルのどこが事業価値のコアになっているのか、有効なレバレッジポイントについても検討。昨年度に比べて、深く掘り下げて考察できました。複数の団体が一緒に研修することで、他団体の事例が参考になったり、客観的な意見がもらえるなど、相乗効果も生まれました。

参加団体の皆様からは「この事業でどんな価値を生み出そうとしていたのかを改めて確認できた」「誰のために事業を実施しているのかが再認識できた」「団体内部の合意形成に役立った」「外部への説明ツールとして、資金調達にも活用できる」「評価指標を検討できたので、継続的にデータを取ることで自団体の事業評価ができそう」など、前向きな声が聞かれました。

## 今後の展開

来年度以降も、ロジックモデル作成団体を増やすことを前提に、より加速化するための改善も必要だと考えます。例えば各地域の中間支援団体に対してロジックモデル研修を行い、作成支援ができる（講師となれる）団体（職員）を増やすこともそのひとつです。また、ロジックモデルを作成して終わりではなく、継続的に指標データを取ることで事業評価につなげるなど、既に作成済みの団体に対しての継続的な支援も実施したいと考えています。

子どもとあそびを通して、地域の人々、県内外のふくしまの復興に思いを寄せる人々とつながり、体と心の向上を目指すプロジェクト　～思いを分かち合う人づくりも共に～

# 特定非営利活動法人 りょうぜん里山がっこう

| 団体概要 |
| --- |
| 〒960-0804　福島県伊達市霊山町大石字細倉17<br>TEL 024-587-1032　FAX 024-587-1082<br>E-mail info@date-satoyama.com<br>URL http://www.date-satoyama.com |

| 活動地域 | 県北地域 |
| --- | --- |
| 活動分野 | まちづくり<br>農林漁村中山間<br>文化芸術スポーツ<br>環境保全<br>子どもの健全育成 |

## 課題・背景

原子力被害、震災について、触れてはいけない雰囲気が確実に増している。そのため、子育て世代のストレスは高まり、子どもに悪影響を及ぼしかねない。ストレスを発散させ、自己実現が可能になる場所が必要である。また、小学生のいじめや不登校、不健康な状態で、心や食事の問題は深刻化している。子どもを取り巻く子育て世代の知識向上や子ども達が遊びを通して自分の心身に気づく場が必要である。また、県外で福島に心寄せてくれる方々とのつながりを継続したい。

## 目的

子育て世代が気軽に集まり、交流を重ね、専門的知見を身につけ生かしながら、自分の得意技をみんなで共有する場を作る。そのために、得意技を持つ子育て世代が活躍できる場の設定と研修の充実を図る。また、幼稚園、こども園、小学校等で、心や食事、本の良さ、音楽の魅力等について披露できる場も設定する。埼玉とのつながりが長崎につながったので、訪問し、これから継続してできる絆の形を模索する。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

地域の子ども体操教室を主催する方々と連携して、遊びや運動の楽しさを伝えるイベントを開催した。約150人が集まり、それぞれの目的に即した遊びや運動を体験した。保護者も体験する姿が見られ、大人と子どもに遊びや運動の楽しさ、必要性を実感してもらえる場となった。伊達市で行ったが、近隣の市からオファーがきたほど、大好評であった。今までのつながりで地域の方々も保育や駐車場等でサポートしてくださった。



### 〈取組2〉

子育て世代が、同じ子育て世代に得意分野をレッスンする場を作った。妊婦向けサロン、食育講座、コンサート、絵本の読み聞かせやわらべ歌、保育サポート等である。また、幼稚園、こども園、小学校、子育て支援センター、児童館等で心の教室、ワークショップ等を開催した。





### 〈取組3〉

昨年は自然の岩場を開拓したが、今年度は人工の壁を設置して、初級者から上級者までが、身体全体を使って挑戦できるボルダリングに触れる機会を提供できた。ボルダリングの壁は、全国各地の愛好者の皆さんがワークショップに集って作り上げて、新たに親子で楽しめる場をつくる事ができた。

## 事業の成果

- 地域の子ども体操教室を主催している方々とつながることで、それぞれの目的に合わせた遊びや運動の提供がしやすくなり、情報交換のできる横のつながりとなった。昨年からの地域とのつながりが功を奏し、たくさんのサポートをいただけるようにもなった。
- ディレクターの運動遊びのレッスン活動を通して、たくさんの子育て世代の得意分野が発掘された。ディレクターの活動場所で、場所の責任者と子育て世代をつなぐことで、活躍できる場所が増え、経験の高まりと共に、自信のついた母親が増えた。口コミで、人から人への連鎖がつながり始めている。
- 福島に心寄せてくれた方々とのつながりは、子育て世代の考え方を広げるきっかけになった。首都圏の人々に今の思いをぶつけたり、福島の地元では言えないことを話せる場にもなり勇気づけられた。

## 今後の展開

- 子育て世代が活躍できる場の提供をする。今年度の活動場所を起点に、研修の充実を図りながら、人や場所の広がりを保証する。
- 福島に心寄せる方々とのつながりを継続するイベントをする。
- 行政の子育て部局と連携しながら、子ども達の健やかな成長を目指し、震災からの復興を確実なものにしていく。

子どもたちが「福島の今」と「自身の経験」を発信する
「ひまわりプロジェクト」地域間交流事業

# 特定非営利活動法人 シャローム

## 団体概要

〒960-1241　福島県福島市松川町東原17-3
TEL 024-563-1584　FAX 024-525-8285
E-mail info@nposhalom.net
URL http://www.nposhalom.net

| 活動地域 | 福島県 |
|---|---|
| 活動分野 | 保健医療福祉・社会教育<br>まちづくり・文化芸術スポーツ<br>環境保全・災害救援・地域安全<br>人権平和・国際協力・男女共同<br>子どもの健全育成・職業能力雇用<br>連絡助言援助 |

## 課題・背景

東日本大震災と原発事故以降、時間の経過と共に情報が減る中、福島県の復興について正確な情報が届いていないのが現状です。このため風評や風化、誤解や偏見が残り、マイナスの影響が続く原因となっています。また、全国で災害が相次ぐ中、天災と人災という複合災害を経験した福島から教訓を発信し、互いに助け合う草の根的な地域間連携を提案すべきであると考えています。

## 目的

シャロームでは原発事故後、全国の協力者との連携で「ひまわりプロジェクト」を展開しています。福島支援から始まった活動が、全国の栽培協力地域内での連携や活性化にも役立つようになってきました。福島の子どもたちが大使としてひまわり栽培協力先を訪問し、複合災害を受けた自身の経験や福島の復興の現状を紹介するツアーを行います。温かな交流を通じた教訓の発信で、誤解や偏見を越えた地域間連携へと結びつけていきます。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

**ひまわり大使九州ツアー（7月末実施）**

ひまわりの栽培にご協力いただいているグリーンコープ共同体のご理解を得て、福岡県と大分県を訪問。栽培者とお会いし、交流で福島の現状や大使自身の経験をお伝えすることができました。グリーンコープでは太陽光発電と売電の仕組みを作っており、大使達は事前学習会で学んだ土湯温泉バイナリー発電所を紹介。再生可能エネルギーの大切さについて意見を交わすことで、良い学びとなりました。



〈取組2〉

**ひまわり大使岡山ツアー（8月初旬実施）**

7月初旬に水害の被害を受けた岡山県を訪問。観光面でも打撃を受けており、福島が被った原発事故後の風評被害を想起させるものとなりました。被害を免れた倉敷地区を訪問して観光の一端を担ったほか、大規模な報告会で福島の現状を紹介し、ひまわり栽培への感謝を伝えることができました。お互いの災害を越えて力を合わせることで共感に基づいた地域間交流の大切さを学ぶことができました。





〈取組3〉

**ひまわり感謝祭（交流報告会）**

活動に参加したひまわり大使が再集合し、全国から駆け付けてくださった受け入れ協力者と再会。各ツアー参加者が互いに活動内容と成果を報告し合い、福島の現状を紹介し、教訓を発信する事業の意義を確かめました。岡山からは小学2年生の「歌っ子すずちゃん」が保護者と共に来福し、復興応援ソング「ひまわり」を熱唱してくれるなど、協力者との交流を通じた活動の幅が豊かに広がりました。

## 事業の成果

ふるさと・きずな維持・再生支援事業として2年目の実施となりました。福島県の復興に関し、まだまだ正確に伝わっておらず、顔の見える関係を紡ぎながらの情報発信が重要であると改めて認識する活動となりました。活動を継続することで風化を予防し、学習を重ねて正確な現状をお伝えする経験は、県外を訪問する子どもたちの健やかで逞しい育ちに結びついていると好評を得ています。活動を重ねるごとに評判を呼び、「当地にも大使に来て欲しい」とのお声をいただくほどになりました。ひまわりの種を撒くことがご協力各地域での助け合いや学び合いにも繋がっている等、当初の予測を越えた成果も生まれています。

東日本大震災と原発事故は自然災害と人災という複合災害であり、発信すべき教訓に満ちています。また福島県が最先端を担おうとしている再生可能エネルギーの普及啓発も素晴らしいアピールポイントとなっています。活動を通じて子どもひまわり大使たちは福島県民としての誇りと自覚を持つことができるように成長してきたことも大きな成果です。

## 今後の展開

1年間の活動で訪問できる地域・交流できる人数は限られており、福島の現状を知りたいという交流希望者が途切れることがありません。今後はこれまで訪問できなかった地域も含めて活動を拡充させ、県外から福島を訪問いただくなどの「相互交流の機会づくり」にも取り組みたいと考えています。また、福島を訪問いただいた方々が戻った先での報告会の実施等も含め、お互いの連携協力体制の発展を目指していきたいと考えています。

安達太良山を起点とした県内周遊による風評払拭事業

# 一般社団法人 岳温泉観光協会

| 団体概要 |
| --- |
| 〒964-0074　福島県二本松市岳温泉1-16<br>TEL 0243-24-2310　FAX 0243-24-2911<br>E-mail info@dakeonsen.or.jp<br>URL http://www.dakeonsen.or.jp/ |

| 活動地域 | 安達太良山周辺地域、首都圏 |
| --- | --- |
| 活動分野 | 観光振興 |

## 課題・背景

原発事故等の影響により、福島県の観光客入込数は大きく落ち込んでおり、県が昨年度実施した「観光客入込状況調査」では、震災前と比べ未だマイナス7.7%となっている。特に、安達太良山周辺地域では震災以降長期に渡り減少傾向が続いており、時間の経過と共に風評被害と地域情報の風化の悪循環が進んでいる。

## 目的

前述の調査でも特に地域において観光客数がやや回復傾向にある安達太良山から県内各地へSNS等を活用した人の流れるきっかけを作り、復興の現状「福島の今」や周辺及び県内各地の魅力を知ってもらうことで震災等に伴う風評の払拭に繋げる。

## 取組内容・実績



### 〈取組1〉

**#ふらっとよりみちあだたらInstagramキャンペーン**

- キャンペーン公式Instagramを開設し、2018年9月15日～11月11日の期間で安達太良山と周辺地域の写真を対象にしたハッシュタグキャンペーンを実施。
- ポスター・チラシ・Webサイトと、安達太良山登山口や山関連のメディアでの広告掲載を中心に周知した結果、合計722件の投稿実績をあげることができた。
- 入賞作品16作品を選定し、Instagramと公式Webサイトにて発表。

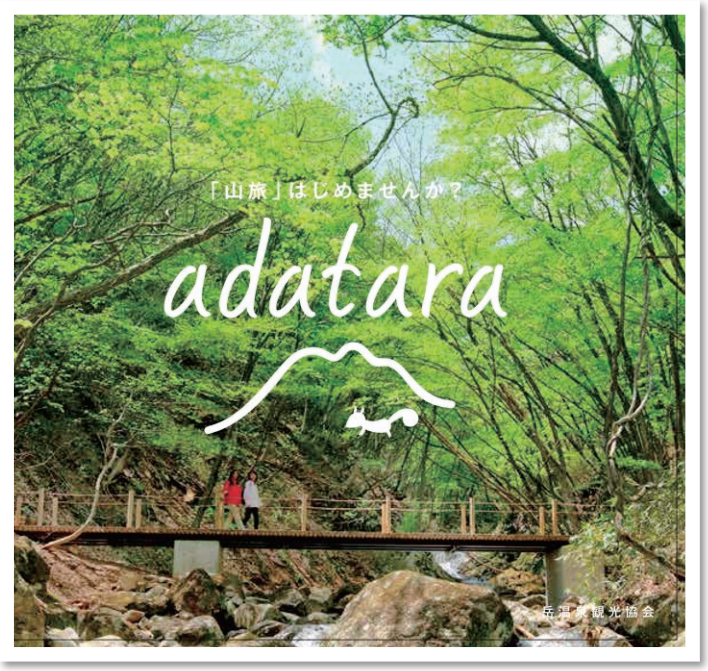


### 〈取組2〉

**JR福島駅での入賞作品展示**

- Instagram利用者以外にもキャンペーンの内容や安達太良山と周辺地域の魅力を発信するため、入賞作品16点の展示パネルを作成。

●安達太良山周辺に留まらない広域での情報発信、及び県外客への魅力・情報発信のため、JR福島駅改札内の東西連絡通路にて作成したパネルを使用した、入賞作品の展示を2月5日～28日の約1か月間実施。




### 〈取組3〉
**キャンペーン小冊子の作成**

●Instagramキャンペーンの内容に準じた小冊子をキャンペーン終了後に作成。

●安達太良山への登山客が登山の行き帰りに寄り道できるスポットやモデルコースを掲載し、周遊を促すことが狙い。

●内容には安達太良山周辺地域で復興に尽力した方々のインタビューを掲載し、各スポットの紹介写真にはキャンペーンの入賞作品を使用。

●1万部の完成品は県内外のアウトドア関係の店舗やメディア向けに配布し、安達太良山周辺地域の周知に努める。

## 事業の成果

①定期的な魅力発信をできるファン層の獲得

Instagramというこれまで活用してこなかった、新しいツールを使って、県内外に向けて安達太良山と周辺地域の情報発信をすることができた。また、キャンペーン公式アカウントのフォロワーも880人を超え、定期的に情報発信をすることができるファン層を得ることができた。

②持続的な魅力発信のノウハウの蓄積

JR福島駅での展示を通じて、SNS上だけでなく幅広い世代の人に発信することができた。同時に、今後も県内外でのイベント等で継続的に安達太良地域の魅力を発信できるノウハウを習得することができた。

③「安達太良山周辺地域」としてのネットワークの拡大

これまで「安達太良山」を中心とした連携はあまり例がなく、本事業におけるキャンペーンの周知や、小冊子の作成・復興に尽力した方のインタビューを行ったことで、繋がりを作ることができ、新たな広域ネットワークの可能性を見出すことができた。

## 今後の展開

●福島県の魅力を伝えることで実際に訪れてもらい、風評被害の払拭に繋げるため、引き続き安達太良山と周辺地域のInstagram及びWebサイトでの情報発信を継続する。

●より多くの県外客に訪れてもらう仕組みを作るため、同様のInstagramキャンペーンの実施等にあたっては、首都圏の民間企業との連携を模索する。また、周辺地域の事業者と今年度でできたネットワークを活用して周知や実施面で連携する。

●SNSでの魅力発信だけでなく、イベントやモニターツアー等を通じて、実際に訪れて地域の魅力をリアルに体験してもらう仕組みを作る。

## 避難社会情報ツール作成による被災12市町村の復興支援者への絆力支援業務

# 特定非営利活動法人 福島住まい・まちづくりネットワーク

| 団体概要 |
| --- |
| 〒963-8035 福島県郡山市希望ヶ丘1番2号<br>TEL・FAX 024-955-6668<br>E-mail sumai.machi.net@gmail.com<br>URL http://fukushimasumai.org/ |

| | |
| --- | --- |
| 活動地域 | 福島県全域 |
| 活動分野 | 社会教育<br>まちづくり<br>情報化 |

## 課題・背景

東日本大震災より8年が経過し、前例のない避難生活（2地域居住等）に対してNPO等による各々の支援が行われているが、支援者は今後の活動の継続について、不透明さや不安を感じている。

## 目的

本事業では、避難生活調査、支援活動調査を行い、避難社会のデータベース作成を行う。その後、専門家による分析・助言をもとに、避難社会の現状と復興活動の多様なあり方を分析し、新たな視点を加えることで、支援活動の判断のベースとなる情報提供を行う。また活動者同士の絆力を深め活動支援の維持に寄与することを目的とする。

## 取組内容・実績

### 〈取組1〉

震災発災以降から現在までの時間を軸として個人、団体等の課題、支援内容及び生活を取材し支援生活全体に密着した情報を収集し他団体と共有可能なデータベースを作成する。支援内容を具体的に把握するため関係者にヒアリングを行う。その後収集した情報を体系化しインフォグラフィック等で図化しわかりやすくまとめ、被災12市町村の復興支援の全体像が把握共有できる冊子を作製し配布する。



### 〈取組2〉

専門家を招き支援するNPO等を対象に専門的な知見や支援の可能性を探るための勉強会を実施する。勉強会で集まった専門的な知見を冊子に反映し支援者の課題、取り組みを客観的に分析し今後の支援の可能性を見える化させる。





### 〈取組3〉

葛尾村復興交流館整備にあたって葛尾村、日本大学工学部、建築設計事務所、当法人の産学官が連携して葛尾村の復興を支援していくために復興交流館に隣接する蔵及び蔵まわりの庭を4者共同で企画設計運営し賑わい創出とコミュニティ形成を目的としセルフビルドで製作する。

## 事業の成果

取組1では個人-15名、団体-10団体にヒアリングを行った。個人、団体共に主に葛尾村、浪江町、田村市（都路）を対象とした。個人では震災前から震災後の生活のあり方や課題について団体では活動の内容と今後の課題についてヒアリングを行った。取組2では取組1でヒアリングした内容をもとに震災前の生活と震災後の生活そして今後の復興に向けた課題について歴史的な視点を軸にインフォグラフィック、イラストでまとめることで他者と共有できる冊子づくりを行った。取組3では建築、自治体、民間企業の方を講師に招き勉強会を計2回行い、今後の復興期における地域づくりについて課題を共有し今後取り組むべき活動について参加者と共有した。また、産学官連携プロジェクトとして葛尾村にてセルフビルドの蔵・庭づくりを行った。少しずつ手入れを行いそれぞれが愛着、絆を持ちプロジェクトに取り組み、魅力ある蔵・庭ができあがった。

## 今後の展開

取組1、2で作成した冊子を活用して復興期における活動者のための知見とするとともに活動者と避難者、帰還者等を交え今後の地域づくりのためのワークショップを開催し絆力を深めていく。取組3で挙がった復興期の課題について勉強会から実践へつなげるため今後モデル事業として4市町村で取り組んでいく。また、手入れを行い蔵・庭の使い方ワークショップを開催しながら完成を終わりとせず今後も絆力を高められる取り組みとして継続していく。

平成30年度

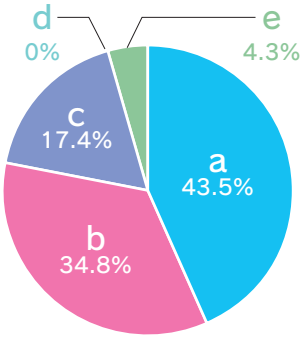
ふるさと・きずな維持・再生支援事業

# アンケート調査結果

実施団体数：23団体

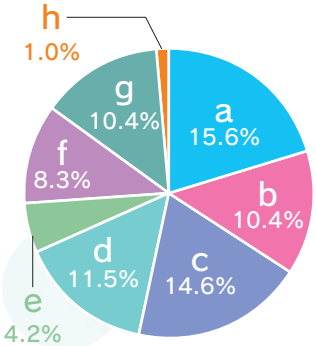
## 1 ふるさと・きずな維持・再生支援事業（以下「きずな事業」という）はどのような活動を展開したものですか？

| | | |
|---|---|---|
| a | 今までの活動の一部内容を発展させたもの | 43.5% |
| b | 今までの活動の範囲を拡大したもの | 34.8% |
| c | 新しい活動として取り組んだもの | 17.4% |
| d | 他団体の既存活動を継承したもの | 0% |
| e | その他 | 4.3% |




## 2 きずな事業ではどのような団体と連携しましたか？（複数回答可）

| | | |
|---|---|---|
| a | 行政 | 15.6% |
| b | NPO法人 | 10.4% |
| c | 任意団体（ボランティア、地縁組織等） | 14.6% |
| d | 公益法人（財団法人、社団法人等） | 11.5% |
| e | 経済団体（商工会、商工会議所等） | 4.2% |
| f | 企業 | 8.3% |
| g | 教育機関（大学等） | 10.4% |
| h | その他 | 1.0% |

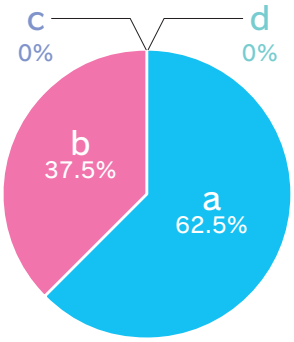



■ その他意見

・飯舘村民生児童委員協議会

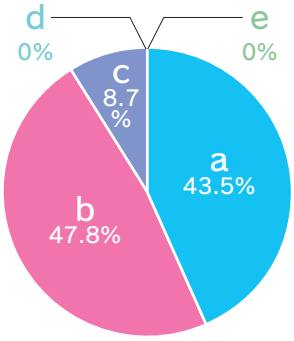
## 3 きずな事業では他の団体と上手く連携することはできましたか？

| | | |
|---|---|---|
| a | 各主体の特性を十分に生かすことができた | 62.5% |
| b | 各主体の特性をある程度生かすことができた | 37.5% |
| c | 各主体の特性をほとんど生かすことができなかった | 0% |
| d | その他 | 0% |



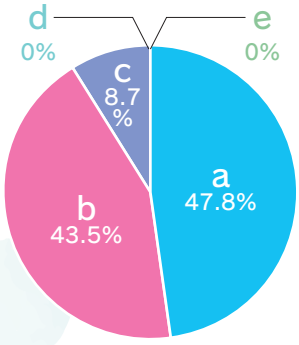

## 4 きずな事業では地域住民の理解は得られましたか？

| | | |
|---|---|---|
| a | 十分に理解や共感が得られた、又は、多くの参加もあった | 43.5% |
| b | ある程度の理解が得られた、又は、一部の参加もみられた | 47.8% |
| c | 一定の理解が得られた | 8.7% |
| d | あまり理解は得られなかった | 0.0% |
| e | その他 | 0.0% |



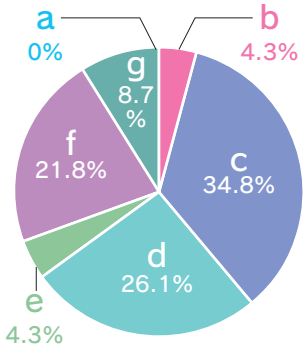

## 5 きずな事業で実施した取組について、目標は達成できましたか？

| | | |
|---|---|---|
| a | 概ね目標を達成できた | 47.8% |
| b | 目標の７～８割程度は達成できた | 43.5% |
| c | 目標の半分程度は達成できた | 8.7% |
| d | 目標の一部を達成できなかった | 0% |
| e | その他 | 0% |



## 6 きずな事業で実施した取組について、改善すべき点はありましたか？

| | | |
|---|---|---|
| a | 地域のニーズに合致していなかった | 0% |
| b | 関係機関の協力が得られなかった | 4.3% |
| c | 事業期間が足りなかった | 34.8% |
| d | 需要が大きくカバーしきれなかった | 26.1% |
| e | 当初の事業計画、実施体制に無理があった | 4.3% |
| f | その他 | 21.8% |
| g | 無回答 | 8.7% |

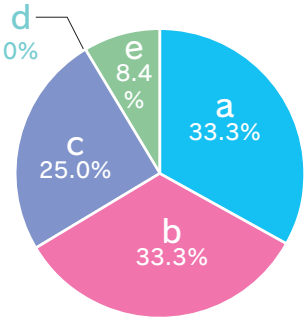



■ その他意見

・実行実施における人材の補充。
・広報、周知期間が不十分だった。

## 7 きずな事業終了後、その取組については継続しますか？

| | | |
|---|---|---|
| a | 事業を拡大して継続する | 33.3% |
| b | 同様の取組を継続する | 33.3% |
| c | 一部手法や内容を変更して継続する | 25.0% |
| d | 継続しない | 0.0% |
| e | その他 | 8.4% |

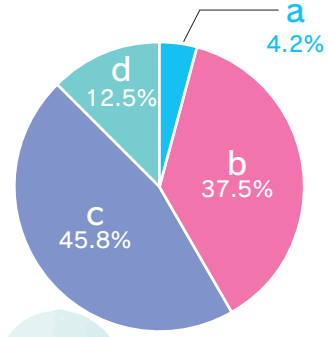



■ その他意見

・地球の環境保全活動を拡大、ボランティアの拡大、継続する。

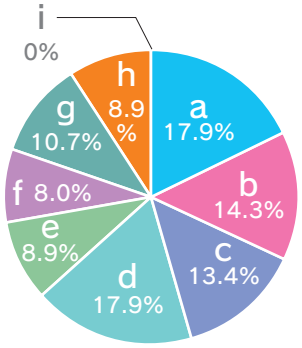
## 8 きずな事業の取組の継続について、資金調達の予定はどうですか？

| | | |
|---|---|---|
| a | 必要な資金はほぼ調達可能である | 4.2% |
| b | 必要な資金の一部は調達可能である | 37.5% |
| c | 必要な資金の調達の目途は立っていない | 45.8% |
| d | その他 | 12.5% |



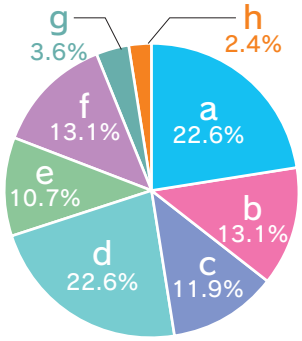
## 9 きずな事業の取組みの継続・発展に必要なものは何ですか？（複数回答可）

| | | |
|---|---|---|
| a | 事業に協力してくれる人材の確保・育成 | 17.9% |
| b | 行政による側面支援 | 14.3% |
| c | 他の主体（地域住民、ＮＰＯ、企業等）との協力・連携 | 13.4% |
| d | 補助金・助成金の充実 | 17.9% |
| e | 会費・寄付の増加 | 8.9% |
| f | 自主事業の拡大 | 8.0% |
| g | 地域資源の活用 | 10.7% |
| h | 専門的知見やノウハウの取得 | 8.9% |
| i | その他 | 0% |



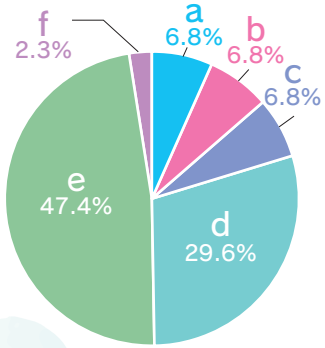

## 10 きずな事業を実施した成果として何が挙げられますか？（複数回答可）

| | | |
|---|---|---|
| a | 様々な団体とのネットワークができた | 22.6% |
| b | 地域課題に取り組む人材が育った | 13.1% |
| c | 専門的なノウハウ等が習得できた | 11.9% |
| d | 効果的な事業立案・実施が可能となった | 22.6% |
| e | 住民主体の活動につながった | 10.7% |
| f | 地域資源を活用することができた | 13.1% |
| g | 新たな起業や雇用の創出につながった | 3.6% |
| h | その他 | 2.4% |




## 11 きずな事業を実施後、団体組織として変化したことはありますか？（複数回答可）

| | | |
|---|---|---|
| a | 会員数が増えた | 6.8% |
| b | 寄付が増えた | 6.8% |
| c | スタッフが増えた | 6.8% |
| d | 支援者が増えた | 29.5% |
| e | 団体の知名度が高まった | 47.7% |
| f | その他 | 2.3% |




■ その他意見

・地元の人々との絆や地域状況への理解が深まり、現場の声に基づいた支援活動団体として少し成長できた。

## 12 きずな事業の実施において、特に苦労した点は何ですか？（自由記載）

- 現金しか使えないことで購入を他に依頼する等、不便が多くあった。
- 特にありません。
- スタッフの時間確保。会社勤めのかたわらにスタッフとして動いているものがほとんどなので、それぞれ時間の確保が大変だった。
- スタッフや講師を集めること。
- 特に苦労した点はありません。ただ、専従メンバーがいない分を委託に頼っていますが、今後事業拡大を進める上では、委託と同等の専従者で対応していく体制が必要と感じている。
- デザインを構築するにあたり、専門性と効果をいかに創るか、かなりの労力を必要とした。
- 開催当日に必要な学生ボランティアの確保がとても苦労した。１日目は必要人数に満たなく、実行委員会メンバーの会社社員にお手伝いをいただくなどの対応が必要となった。
- 事業を始めた半年間までは、アンスリウムの試験栽培をしている農家が一軒であったため、供給できる量が少なく、負担が大きくなってしまった。また、栽培を開始した9か所も生育や時期の折り合いが合わなかった為に、町イベントの参加が難しかった。
- より地域にとって効果的な取り組みとする為に、事業期間内に地域の意見を取り入れていく事で、申請段階で想定していた取組内容や予算から大きく修正が必要な案件や補助事業の枠を超えた取り組みの必要性が発生した場面があった。補助事業であるが故に計画変更の承認や実施前の相談が必要な事は十分に理解した上で、やはり事業のスピード感という点ではもどかしい思いも感じた。
- 空き家を手放すことに前向きになれない所有者との話し合い、所有者不明の空き家の調査。
- 特にない。営利を目的としない慈善事業という性質から、周囲の理解、協力を得ることが容易で、終始スムーズに事業を進められたように思う。
- 事業の目的(テーマ)を地域に周知させること。事務局内の実地に対してスタッフの体制が適切でなかったこと(人員不足)。助成金の獲得。
- 広く多くの方に参加してもらいたく、告知に努めたがなかなか参加者が増えなかった。
- 活動拠点を首都圏から福島へ引き継ぐ人材の確保。福島大学との連携にて、アーカイブ化に向けまだまだ課題山積であること。
- 2018年6月に実施した「くぼたんけん」は、雨天による影響もあったことから、当日の参加者を増やすことに苦労した。
- 活動に参加したいと希望されている村民の方の送り迎えをしてくださる民生委員に負担がかかった。もう少し送迎ボランティアシステムが整うことが望ましい。
- 講義の連続開催の準備やそれを担当するスタッフの不足に苦労した。
- 研修プログラムの開発に当初予定より時間がかかったこと、専門家招聘にあたり先方との開催日程の調整に時間がかかったことで、周知期間が十分に確保することが難しかった。

- 同じ福島県の補助事業であるのに、事業ごとに経費の区分や基準、作成書類も様々なので、確認することが多く事務作業の手間もかかる。効率化のためにも基準・書式等をある程度統一していただけると助かる。補助を受ける団体だけではなく、行政側の担当者の方にとっても人員・時間・コストの削減につながるのではないか？非営利団体に転職して初めていくつかの補助事業を担当しましたが、長く民間企業に勤務していた身として、率直に感じた。
- 人と人、人と場所をつなげるためにディレクター自身の信頼関係をつくることが苦労した。
- 事業実施中に協力者との協議を行うため、計画に発展的な変更が生じる。このため当初予測と比較して経費面での内容変更が生じた。当該年度が始まってからの調整となるため、福島県と相談しながら助成金枠内で事業経費の柔軟性を確保したい。年を追うごとにひまわり大使の来訪を希望する団体が多いため、選択に苦慮した。継続を期待する声も多いことから、より効果的な活動に向けた検討が必要である。
- 初めて行った内容の事業だったため、手探りのことばかりで進め方を常に模索しながらだったことが大変だった。
- 取組を行うにあたっての関係者間の調整が特に苦労した。取り組む上での調整に関わる時間の配分、人員の確保が課題である。
- 昨年より更に多くの事業者の方々にヒアリングを重ね、情報の入手や課題の抽出に苦労しました。また、データブックへの課題やデータ掲載にあたり、総花的ではなく幅広い角度から的を得たデータの選択に苦労しました。

## 13 復興支援・被災者支援活動において、現在、特に課題となっていることは何ですか？（自由記載）

- 都市間交流の不足による風評被害の払拭。
- 事業資金の不足。
- 復興という意識が、地域住民自体薄くなっているように感じる。
- 避難者・帰還者のコミュニティの再興、活動における資金調達、スポーツクラブの会員集め。
- 過去8年の活動で県内・港区、それぞれの地域・住民との連携や行政機関との調整も円滑になっている。東京・港区からの発信を目指す団体として、2020へ向けて事業規模拡大のために寄付や企業助成など事業資金の確保を急ぐ必要がある。
- 生活者レベルにおいて、風評や風化に抗うという活動が少ない。
- 復興支援に関する事業が多く、関係者として関わる人への負担がかなり大きいのではと危惧します。
- 新規就農者の確保をする事です。また、2020年のオリンピック・パラリンピックに「復興の花」としてアンスリウムを使用していただけるように活動をしていきたいと思います。

- 経済面・人材面等を含めた総合的に自立した組織基盤の構築。それをなし得る為の、復興支援活動という枠における、ボランティア性とビジネス・収益性の両面のバランスや、NPOという組織に対する裨益者の認識に関しては、見極めて対応していかなければいけないように感じている。
- 農林水産物の風評払拭においては、震災からこれまで関係者が献身的に訴えてきたが故に、「風評払拭」という言葉や活動に食傷気味になっているところが情報の発信サイドと受信サイド両者にあるのではないか。一方で、未だ安心安全を周知できていないターゲットがいることが本事業を通して再確認できた。従来の手法や規模にとらわれない、よりきめ細かい風評払拭活動が必要となっているように感じる。
- 人材の確保(事業の目標に賛同し、動く事の出来るスタッフ確保)。資金の確保。帰町人口の少なさ、支援を受ける側の人間が固定されていること。
- スタディツアーを多くの人に参加してもらうためには、ある程度参加費をリーズナブルに設定したいが、助成金や寄付などの補助がないと難しい。
- “災害の風化”震災から8年経過しているため、こちら首都圏では殆ど記憶から外れて行っている。少なくも、請戸小学校で起こった事実はみんなに伝えてゆかねばと考えている。
- 住民間のコミュニティ形成、相互理解の浅さ、団地内住民の孤立、団地内外の軋轢。
- 復興にはまだまだ長い道のりがあります。原発被災を被った地域の人たちにはこれからも寄り添っていく必要があります。メディアからの発信、人びとが気楽に交流できるような仕掛けを国、県、村、それぞれの段階でしていくかということが必要だと思う。
- 事業をいかに継続させて“伝統”的な「文化」に昇華させていくことが課題。
- 団体の知名度を上げること、継続寄付者、支援者を増やすこと、他の主体(地域住民、NPO、企業等)との協力・連携関係の強化。
- 復興期間が終わる2020年に向けて、資金調達がますます厳しくなってくる。2019年から開始される休眠預金への具体的なアクセス方法。人材確保。
- 子どもを育てるための環境の充実。特に福島は原発事故による放射能について危機感が常に付きまとうストレスのための会話や支援方法。
- 県外に出てみると、福島県の復興状況が正確に伝わっていないことを痛感する。
- ひまわり大使として教訓を発信する大使達もこの点を如実に感じているようだ。福島から発信する「現状」や「防災・減災に果たす役割」の大きさは増すばかりである。毎年のように災害にみまわれるケースが増えていることも鑑み、当該活動の継続と拡充が大切と感じる。一方、子どもひまわり大使の活動期間は短く、費用の捻出も困難な状況である。経済的な利益を生む活動ではないため、風評と風化を超えるための実践策として更なる工夫と努力が不可欠な状況である。
- 復興支援と観光を考えたときに、どのような形での情報発信が適切なのか。復興の現状をアピールするのか、県外の観光地と同じように純粋に魅力をアピールしていくのか、など。
- 復興支援活動者それぞれで求める成果等が異なること点はあるが、資金面や人員面等を鑑みるとより連携した活動、取組を行い、合理性が必要であると感じる。現在行われている復興支援活動の総数や内容をリサーチすることが求められると考える。
- 支援活動自体が自走できるように、資金を生み出すシステムが構築できていないのが課題です。

# 成果報告
# 交流会

平成30年度

## ふるさと・きずな維持・再生支援事業

# 成果報告交流会

**開催日時**　平成 31 年 3 月 20 日（水）

**会　場**　杉妻会館　4 階洋大会議室（牡丹）
福島県福島市杉妻 3 － 45

**目　的**　NPO 法人等が被災者同士、被災者と支援者等を結びつける「絆力」を活かして実施する、震災からの復興支援活動等を支援することにより、本県のきずなの維持・再生を図るものです。

**プログラム**

| | |
|---|---|
| 13：00 ～ 13：10 | 開会（挨拶 等） |
| 13：10 ～ 14：50 | 成果報告発表 |
| 15：05 ～ 15：20 | 来年度の NPO 関連事業の説明（文化振興課） |
| 15：20 ～ 16：00 | 交流会（参加者交流・名刺交換　等） |
| 16：00 | 閉会 |

**発表団体**

特定非営利活動法人　南相馬サイエンスラボ
特定非営利活動法人　がんばろう福島、農業者等の会
特定非営利活動法人　アイカラー福島
NPO 法人　かわまたスポーツクラブ
特定非営利活動法人　Social Net Project MOVE
特定非営利活動法人　ふくしま飛行協会
ふくしまキッズ博実行委員会
川俣町ポリエステル媒地活用推進組合
特定非営利活動法人　元気になろう福島
NPO 法人　中之作プロジェクト
福島県米穀肥料協同組合青年部
特定非営利活動法人　富岡町 3.11 を語る会
特定非営利活動法人　福島県有機農業ネットワーク
特定非営利活動法人　団塊のノーブレス・オブリージュ
特定非営利活動法人　ふくしま再生の会
特定非営利活動法人　プロジェクト FUKUSHIMA
一般財団法人　ふくしま百年基金
特定非営利活動法人　相馬はらがま朝市クラブ
一般社団法人　Bridge for Fukushima
特定非営利活動法人　りょうぜん里山がっこう
特定非営利活動法人　シャローム
一般社団法人　岳温泉観光協会

以上 22 団体

# 平成30年度
# ふるさと・きずな維持・再生支援事業
# 成果報告交流会




平成30年度 ふるさと・きずな維持・再生支援事業

# 成果報告交流会

ふるさとふくしま

参加無料

**開催日時** 平成31年 **3月20日(水)** 13:00～16:00（12:00より受付）

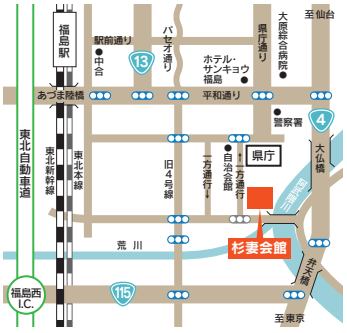
**会場** **杉妻会館 4階 牡丹**
〒960-8065 福島県福島市杉妻町3-45
TEL 024-523-5161(代)

- 福島駅から徒歩10分
- 市内循環バス「大町」下車、徒歩5分
- 東北自動車道「福島西I.C」から車で約10分

## プログラム

13:00～13:05 開会(挨拶 等)
13:05～14:50 成果報告発表
15:05～15:20 来年度のNPO関連事業の説明(文化振興課)
15:20～16:00 交流会(参加者交流会・名刺交換 等)
16:00 閉会

※会場内に各団体の活動紹介のパネルを展示します。
※プログラムの内容・時間は予告なく変更になる場合があります。




## 今年度採択団体（25団体）

特定非営利活動法人 南相馬サイエンスラボ／特定非営利活動法人 がんばろう福島、農業者等の会／特定非営利活動法人 アイカラー福島／NPO法人 かわまたスポーツクラブ／特定非営利活動法人 Social Net Project MOVE／特定非営利活動法人 ふくしま飛行協会／ふくしまキッズ博実行委員会／川俣町ポリエステル媒地活用推進組合／特定非営利活動法人 元気になろう福島／NPO法人 中之作プロジェクト／福島県米穀肥料協同組合青年部／特定非営利活動法人 富岡町3.11を語る会／特定非営利活動法人 福島県有機農業ネットワーク／特定非営利活動法人 団塊のノーブレス・オブリージュ／勿来ひと・まち未来会議／学校法人 山口学園ECC国際外語専門学校／特定非営利活動法人 ふくしま再生の会／特定非営利活動法人 プロジェクトFUKUSHIMA／一般財団法人 ふくしま百年基金／特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ／一般社団法人 Bridge for Fukushima／特定非営利活動法人 りょうぜん里山がっこう／特定非営利活動法人 シャローム／一般社団法人 岳温泉観光協会／特定非営利活動法人 福島住まい・まちづくりネットワーク

※上記のなかで当日、悪天候等により報告できない団体がある場合もございます。

**申込方法** 電話・FAX、またはHPの入力フォームより事前にお申し込みください。
※詳しくは裏面をご覧ください。

**お問い合わせ先** ふるさと・きずな維持・再生支援事業 事務局
（ふくしま地域活動団体サポートセンター内）

〒960-8043 福島県福島市中町8番2号 福島県自治会館7階
TEL 024-521-7333 FAX 024-523-2741
E-mail kizuna@f-saposen.jp URL https://f-saposen.jp

主 催／福島県　事務局／ふるさと・きずな維持・再生支援事業 事務局（ふくしま地域活動団体サポートセンター内）

平成30年度
ふるさと・きずな維持・
再生支援事業

# 成果報告交流会のようす



## 分科会A





## 分科会B







## パネル展示






## 来年度事業説明会




## 交流会







平成30年度
ふるさと・きずな維持・再生支援事業
# 活動成果報告書

平成31年3月31日発行

**発　　行**　福島県企画調整部文化スポーツ局 文化振興課
〒960-8670 福島県福島市杉妻町2-16（県庁本庁舎5階）
電話 024-521-7179　FAX 024-521-5677

**運営受託**　認定特定非営利活動法人 ふくしまNPOネットワークセンター

**事 務 局**　ふくしま地域活動団体サポートセンター
〒960-8043 福島県福島市中町8-2 福島県自治会館7階
電話 024-521-7333　FAX 024-521-2741


ふるさと・きずな維持・再生支援事業